

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第147号（2018年8月）

風に吹かれて（124）

白井啓治

・今日の暑さに抗うなど雀等のいう

禅の問答の中にこんなものがある。

僧問う。

「寒暑到来を如何に回避せん」

師答えて曰く。

「寒の時は闇黎（じやり）を寒殺し、熱の時は闇黎を熱殺す」

だが今年の暑さは、「心頭滅却すれば……」などと言つていられる暑さではない。異常気象の暑さである。異常な自然現象には、夫々が「てんでんこ」で、先ずは自分の助かることを考えなければならぬ。しかし、「てんでんこ」なんてことを言ふと、何を勘違いしてかどさくさに紛れて自分の利だけを考える輩が出て来る。この所のニュースを見ているとモリカケに始まって私利私欲の続々報じられている。

あほな政治家たちに交じつて役人たちのせこ過ぎる、みみっち過ぎる話があちこちで明らかにされている。女史のレスリング協会の話が出たと思つたら次はアメフト問題、今はアマチアボクシング協会が話題をさらっている。この猛暑の中で、腐敗したものが一層の異臭を放つてきて放置

しておけない状況になってきたのかも知れない。最たるダメ押しは、役人の息子の裏口入学だろう。ならばもともとと猛暑の記録を塗りつぶして、腐敗した膿をドンドン出すが良いだろうとさえ思つてしまふ。

しかし、政治腐敗、各団体・協会・連盟等の腐敗を糾弾する時、同時に自分自身を振り返つてみる必要がある。わずかな異臭が出た時、または現状を放置したら腐敗が出て来ると認識出来る時に何故声をし、手を打とうとしなかったのか、と。

小生の子供の頃、冷蔵庫などはなかった。あつても氷屋さんが朝配達してくれる氷を入れて冷やす冷蔵庫しかなかった。母親たちは、食中毒防止に腐心した。その知恵を皆持つていた。微妙な腐敗初期の異臭も嗅ぎ分けられた。どうも現代人は腐り始めの異臭も嗅ぎ分けられなくなったようだ。そんなことに連動して、人間の腐敗にも鈍感になってしまったようである。

最近こんなことを思つたりする。小さな異臭を感じ取ることが出来なくなると、どうも人間は何処かに帰属して楽をしようとするようである。細かなことは忘れたが、日本の若者達の独立心が低いと言うデータを見たことがあった。

狭い見識の小生から見ても、確かに独立心が希

薄に思える。日本の社会そのものが、もともと若者の独立を歓迎しないような下地があったことは確かであるが、今は更にその傾向が強いように思える。これはもう親の教育によるものだろう。

受験勉強をさせて少しでも有名大学に入り、大企業、優良企業、役所に入れば人生安泰だと刷り込まれたに違いない。それを刷り込んだ親達には、組織に立ち向かう気持ちなど持つていないのだから、独立心など育つわけではない。

人間は皆それぞれに固有の才能を持つて生まれできたはずなのに、自分の才能に気づくこともなく、埋もれさせた反省も持たず、少しでも安定した場所に帰属する事ばかりを考え願つてしまふようである。

猛暑の中、夏休みに入ったが、家の周りに子供たちの声がない。猛暑で外に出られないのではない。午後には母親の車に送られて塾通いをしていくようだ。その塾では親たちの望む、帰属のための学習がなされているのだろう。

生涯一度だけ映画会社に入り給料をもらった事があった。一年にも満たない期間であつたが。その時に面接にあつた製作室部長の言葉をときどき思い出す。

「大学はやめたのか？」

「ええ、二つ行つて二つともやめました」

「映画界は、大学に入る頭があればいい。その頭がなければ困るが」

……であつた。8ヶ月ほど在籍しただろうか。退職して脚本家として独立し、今に至っているわけだが、何処かに帰属していればよかったのと思つたことはない。おかげでわずかな腐敗の始まりを察知する嗅覚はまだ失っていない。

「狂気」を正せ！

菅原茂美

先月号で「何かが狂っている」と書いた。考えてみると、世の中は何かが少々狂っている：ではなく、何もかにも皆、狂いっぱなし：と言った方が正しいかもしれない。なぜ狂ったのか？ では、どうすればよいのか？

私が健康であった頃は、これほどまでに大声で吼え続けはしなかった。長年の公務員生活で抑圧を受けたリアクションか？ それが、老い先も短く、更に3種類のがんを患い、おまけにある程度の認知症も進行中かと思うと、何も、この世に遠慮は要らぬ。どこからも援助は受けず一切自己責任で歯に衣着せず、言いたい放題吼えまくれ：といささか勇み立つ。但し、正義感を貫き通す事だけは、必須の条件。

認知症の件に関し、私は2014年にすい臓がんの大手術を受けたばかりなのに、16年に悪性リンパ腫という血液癌を患い、抗がん剤と放射線照射で何とか納まっている。ところが視力に異変を感じ、脊髄から抗がん剤を注入したが、時すでに遅し。眼球は正常なのに、脳に映像を送る神経束が腫瘍にやられ、効き目の右目視力を喪失。左目と脳を守るため、やむなく認知症を覚悟の上で、意志・創造を司る前頭領野を避け、1か月間、脳に3方から放射線を浴びた。

ところが照射の最中、私は家族に対して話す事が全くメチャクチャ。人格喪失状態。食事中に居眠り。更に極度の頭痛に声を出して泣きながら脱毛中の頭髪をかき集めたとか。これを見て家族は第一巻の終わりを覚悟したという。私自身にはその自覚はなく、某政府高官の国会答弁じゃないが『全く記憶にございません！』

今、分析してみると、右目視神経束ばかりでなく他の正常脳細胞もがんに罹ったばかりか？あわや一部ががん化の直前か？脳に抗がん剤は届かないそこで放射線照射。結果は効果てき面。運よく急転直下治癒。正常脳細胞の一部ががん化開始と、放射線照射の同時進行で脳は大混乱。それが私の人格喪失の原因だったらしい。

私の場合、日本では非常に珍しいB細胞型悪性リンパ腫という事で、勿論筑波大で初めての事。試行錯誤の連続。経験のある京都大学と連携中。人生って本当に何が起るか分からない。そんな訳で、今後、私の書く事が、あまりにも常軌を逸した場合は、遠慮なくご指摘願いたい。

*

先月号で、あれだけ例を挙げて吼えまくったのだから、もうネタ切れかと思いきや、眠れぬ夜など、次々続編が乱舞する。私がしみじみ思うに、人類はいかに知能発達しても、なぜこんなに苦しい社会現象が、後を絶たないのか？

我が国における歴史上の「恥部」。秀吉や徳川幕府によるキリスト教弾圧。癩患者の強制隔離。士農工商の階級制度。大東亜戦争により³¹⁰万人死亡。アイヌに対する差別。言論統制。数々の冤罪。近くは優生保護法による断種手術。オーム真理教事件。過労死問題。ブラック企業。検査記録捏造。深刻な環境汚染。「諫早湾水門」は明けても閉めても農民・漁民双方に補償金支払い。国有財産の不当売却。公文書改竄。いじめや子殺し。高齢者への電話詐欺事件。国の莫大な借金。国会に出席もせず、審議未了とはこれいかに？与党は議員過剰と批判を浴びる中、一票の格差是正のため、6議員を増やそうとしている。与野党共、高給を貪るサラリーマン議員か？

世界的には繰り返す先進国の侵略。独裁国家の人権侵害。数々のテロやサイバー攻撃。知的財産権侵害。貿易摩擦。軍拡競争。核弾頭は18年1月現在14465発(米ロ英仏中印・パキスタン・イスラエル・北朝鮮)。世界が削減の努力中なのに、のぼせている中国だけが増加。宗教対立や露骨な民族主義。万物の霊長はどうなってるの？

私がかチンと来ているのは幕末にペリーが浦賀に来たのは、日本近海で米国捕鯨船500艘が鯨を獲り放題。遠洋航海で新鮮な水や野菜と薪が欲しいから。和親条約は二の次。米国は鯨を絶滅危惧種とした張本人なのに今、日本の調査捕鯨を猛攻撃。責任転嫁だ。

これら狂気の原因は、遺伝学用語の「ボトルネック効果」の醜い部分が、人類の進化過程で、後世へ濃厚に遺伝したからに相違ない。

【「ボトルネック効果」とは、ある生物集団が何らかの異変により、急にその数を減らした時、多様性を失い、生き残った少数の者の遺伝子が、子孫に収斂して、濃厚遺伝する現象をいう。】

ならば我々ホモ・サピエンスに何が起こったのか？人類誕生絵巻を、もう一度お読みしよう。

我ら人類の大元の祖先は、今から700万年前、アフリカで、チンパンジーの突然変異として共通祖先から分離独立した。新種の最大特徴は、「直立二足歩行」である。

他に、他の動物と人類の大きな違いは、脳に大量の血液を送るための動脈が異常発達した。「体毛」と「矢状稜(じょうりょうりょく)」が無くなった。「鋤鼻器(じょびき)」や「犬歯」の退化。更に道具の使用、言語の発達など、多数の「ヒト」化現象が起きたが、現在の人類の行動を決定づけたと思われる「ボトルネック効果」は、「争いの常習化」とい

う悲しい運命を背負う事になった。

今から20万年前、アフリカでホモ・エレクトス原人の突然変異として現れた我々新人「ホモ・サピエンス」は、今から7万年前、エチオピアあたりから、アラビア半島へ数百人の規模で移住して来た。しばらく半島に留まり、人口が1万人程に増えた頃、インドネシアのトバ山が大噴火。地上はその煤煙で太陽光が充分届かず急冷却。氷河期に突入。多くの動植物が死滅。その時、人類の祖先も1千人ぐらいに急減。当然生き残った祖先は、利己的に振舞った個体のみが子孫を残す事になった筈。いわゆる「ずる賢く腕力の強い者」が生き残った。お人好しの、ゴクラクトンボは生き残れなかったであろう。即ち利己的な遺伝子が集い……という性格の人々のみが生き残り子孫を残した。こんな事に言及した学者の論文を見た事は無いが、恐れながら私はそう信じる。そのマイナスイ面が現在、全人類へ集約的に遺伝した。いわばこれが「性悪説」を地で行く「人間の本性」なのである。

ただし人間には知恵がある。利己的行動のみでは社会が乱れる。許せない。社会正義を重要視する思想も発達した。宗教も発展。隣人愛の思想も社会に根を張る。善と悪のせめぎ合い。人類進化は今、発展途上の現在進行形と言える。

＊

さて現在の人種は、アラビア半島を起点に北へ走った人々は、コーカソイド(白人)。東に向かった人々はモンゴロイド(黄色人種)。アフリカ方面に逆戻りした人々はネグロイド(黒色人種)と、大きく三種に分かれるが、いずれにしても最初にアフリカから、アラビア半島に移住してきた数百

人の黒人が現在の全人類の元祖である。それゆえ肌の色とか、言葉や宗教が違うなどで、いがみあうのは誠にはしたくない。全人類は皆親戚なのだ。

【ここで明言しておくが、現在の人類は、アラビア半島から分化したサピエンスのみが祖先ではないとする「多地域進化説」がある。北京原人やジャワ原人、そしてネアンデルタール人が、それぞれの地で別個に進化したとする。しかし、ミトコンドリアの系統的DNA鑑定などの結果、それら学説は現在完全に否定されている。但し、3万年前に滅亡したネアンデルタール人については、DNA鑑定技術の進歩により、現代人と共存期間が重複し、かなり混血が行われ、白い肌・金髪・青い目等、その名残が、厳然として存在する。】

南北米大陸を侵略したヨーロッパ白人が、9千万人の先住民の9割を殺害し、土地や財産を奪った。更に新天地開拓のため、アフリカから黒人を拉致。競りにかけ売買し、奴隷とした。このような残忍性は、多分私の偏見かもしれないが、ネアンデルタールの血を濃く引く白人に強く現れ、誠に醜い人間性を示しているように思われる。

同じく白人は、オーストラリアでアボリジニを、ニューギランドでポリネシア系マオリ族を駆逐。更にアジアでも後進国を次々侵略した。あの独善的利己主義をどう解釈すればよいのか。文明の発達した欲張り先進国は、次々侵略を続けた。

しかし、現在のアフリカでの内乱による残酷性も酷いものだし、中国では、幾多の国家の盛衰の繰り返し。そして、日本でも国盗り合戦等、似たような現象が起きているのだから、ネアンデルタールの遺伝子に拘るのは軽率かもしれない。ネアンデルタールの遺伝子はアフリカを除く全世界に浸透しており、日本人の遺伝子にも2%は含まれ

ているという。要するに、現在の世界共通の独善的利己主義行動の原因は、アラビア半島での、ボトルネック効果の悲惨な結末と私は考えたい。

今から2900年ぐらい前から、朝鮮半島経由の流れ者である弥生人が一気に(百万人)押し寄せてきて日本列島10万人の先住民(縄文人)に対し、過酷な抑圧を加えた。弥生人は、いわば大陸での戦争難民。その難民達がこの列島で敗者復活戦さながらの、熾烈なバトル合戦を展開。その勝者が「王」として君臨。縄文人4千体の遺骨調査で、戦による傷跡は見当たらないが、弥生人骨には、斬首や刀傷が無数にあり、結核によるカリエス痕が多く見られる。その戦争好きの弥生人の勝者である大和朝廷により、繰り返し東北地方が征伐された歴史を私は残念に思う。弥生人成り上がり朝廷とやらが、縄文人&アイヌを、さんさん痛めつけた。例えば797年、坂上田村麻呂は桓武天皇により征夷大将軍として任ぜられ、蝦夷征討。阿弓流為(あてるい)・母礼(もれ)軍を破り凱旋、兩名を処刑し鎮守府を胆沢(いさわ)城とする。私はその胆沢村(現奥州市)出身である。【郷里自慢は「水沢緯度観測所」(木村栄博士の地軸歳差運動の2項発見で、1899年設立。北緯39度8分線上に位置する日米等世界6か所の緯度観測所を束ねる中央局。世界標準時を定める機関)。人材では高野長英・後藤新平・斉藤実首相等輩出。二刀流大谷翔平君の生家は、私の生家に近い】。

次いで、八幡太郎義家父子による「前九年の役」(1051〜64年)、「後三年の役」(1083〜87年)で、安倍貞任・宗任兄弟の治める奥州は平定された。現・安倍晋三総理は宗任の末裔と言われる。私の母の実家である「衣川」の屋敷裏山には、「古戦場跡」の石碑に義家・貞任の優雅な連歌が刻まれている。義家は武人初の「殿上人」となる

歌人でもあり、貞任とて、ただの田舎侍ではない。
《年を経し糸の乱れの苦しさに衣のたては綻びに
けり》(義家が下句を先に詠み、貞任が上句を後から応える)。

更に源頼朝の猜疑心は根深く、弟義経を匿った
罪により、奥州藤原3代目、秀衡が亡くなるや否
や4代目泰衡を攻め、平泉を平定した。藤原三代
は極楽浄土を目指して、平泉文化を醸成したが、
狭量の頼朝により、灰燼と化した。

なお、イタリアの商人マルコ・ポーロは、アジ
ア極東の島に、黄金の建造物(金色堂)がある…と、
「東方見聞録」に表した。それを読んだイタリア
の航海士コロンブス(海賊か?)は、それを奪いに行
こうと決意し、地球は丸いなら西へ西へと向かえ
ば東の国へ着くに相違ない…と考え、1492年
スペイン女王イサベルの援助を得て西進。ついに
カリブ海のサン・サルバドルに上陸。これが後の
南北米大陸発見へと繋がる。

*

そんなこんなで人類とは、根本的に他人の物を
掠め盗り、俺さえ良ければそれでよい…とする「性
悪説」で彩られた醜い根性の持ち主。それに対抗
し「良識」が、いかに正常社会を打ち建てるかは、
偏にこれからの人類の努力如何にかかる。

一般に動物は、食糧にする最小限度内でしか、
他の動物を殺しはしない。ヒトはどうか? 余り
にも他の生物の「命」を厳肅に受け止めていない。

私は獣医師であるが、人類は家畜を飼育し、食
糧にするために、畑の野菜みたいはその命を翻弄
する。牛が殺される時、涙を流す姿を見た事があ
りますか? 自然界における人類という存在は一
体なんなのか? 多数の生物が進化する中で、霊
長類という一部の大型類人猿の中から、ヒトと
いう一風変わった怪物が生まれた。それが地球上

をほしのままに荒らしまくって良い訳はないだろ
う。地球の人口収容能力の倍近く、人口を無軌道
に増やし続けた超乱暴者。増え過ぎて縄張りが重
複し暴力本能で戦争するしか能がない人類。

狼は、食糧となる鹿等が減れば、交尾をしない
嚴重な規律を守り通す高度の精神構造を有する。
それに対し人類は、食糧があるうがなかるうが、
むやみやたら子を産む。この「無秩序」は称賛す
る気にはならない。自虐史観に囚われて当然。

アイヌ民族は、神様から食べ物を分けていただ
く…という謙虚な気持ちが浸透しているという。
これは世界の民俗学者が一樣に認め、アイヌに尊
敬の念を抱いているという。アイヌ人は今、全国
で20万人と言われるが、和人はアイヌを虐待した
ので、アイヌは身分を明かさない人が多数。その
為、実数は不明。占領者が先住民を抑圧・混血・
奴隷化した経緯は、世界の各地に見られた。

*

ならばこれほど乱れた世の中を、いかにして、
立て直すか? 「勸善懲惡」これしかない。善事は
皆で力を合わせ、大いに勧め、はびこる悪事は、
あらゆる手段を講じて、懲らしめるしかない。

人類行動の最悪は「戦争」。過去の日本を思い出
してみよう。否応なしに「徴兵制度」。言論統制に
憲兵隊横行。有りもしない史実をデッチ上げ、国
民を洗脳する。反対者は逮捕投獄処刑し、どんな
高貴な思想も肅清抹殺。挙句の果ては物量に勝る
敵国に押しまくられ、原爆まで落とされ投降。

農家なのに食べ物にも不自由。資源最貧国の日
本は、輸入に頼るしかないが、その道が断たれる
と、釣鐘も半鐘も供出。あくあ、なんてこっちゃ。
隣国が今、そんな状況らしいが、国民の苦痛を思
うとかわいそうでならぬ。政府が狂いだしたら、

巨大化する前に何とかして阻止すべきだ。

規模を地方の小事件に置き換えるなら、それ「公
共事業」だ「箱物」だと、緊要性は無視。裏で増
収賄行為が呆れるほど横行する。選挙民にも大き
な責任がある。そんな首長を見抜けず投票した見
返りは甚だ大きい。醜い「金と権力」。

今、日本もやっと環境汚染に気が付いた。未来
の子孫からの預かりもの…と言われるこの地球を、
今時の人類が、ただ自分の金もうけのために、大
量に物を造り続け、カスや屑を山と積み、空気が
水や土壌を汚染し続けて良い訳はない。

問題は個人の生活態度。衣食住の贅沢は環境を
汚染し、自然破壊に繋がる。余計なものは作らぬ
事。使わぬ事。今の今、俺さえ良ければそれでよ
いとする姑息な態度に終止符を打つ事。そして社
会全体は、文明進化の速度を緩める事。自動車を
馬車に戻せとまでは云わないが、新幹線では物足
りないから「リニア」とは、酷すぎる発想。英仏
開発の「コンコルド」の経緯を見ればよくわかる。

終末時計の残り時間を延ばしたかったら、文明
進化速度をもっとゆっくり回せ! 私の本心は、
進化の歴史を遡り、人類は温厚なゴリラの家に
なって、修行し直したらよいとさえ思う。或いは
超科学を利用して人類の好戦的な遺伝子を一掃。
ゴリラの温厚な遺伝子に組み替える。しかしゴリ
ラ×サピエンスⅡゴリエンス(私の造語は生まれな
い。理由は染色体数が違い、卵膜のゼリーを互い
の精子が溶かせないので受精不可能。

人類は環境改善に全霊を傾け、さすが21世紀の
先輩はよくぞ目を覚まし、方向転換してくれた…
と子孫から尊敬されるよう、全世界が、魂のネジ
を巻き直す時だと、しみじみ思う。

【W盃赤い悪魔に伸(め)されたが、次は炎を噴け!

地域に眠る埋もれた歴史 (41) 木村 進

常陸の国府と府中城

(1) 常陸大掾氏と関東平氏・源氏の流れ

石岡の歴史を見る時にどうしても避けることができない常陸平氏(大掾氏・だいじょうし)について基礎知識を調べてみなければなりません。そうでないと変に空威張りしたり、外部の人に知らないことを指摘されたりするとすぐに頭を隠してしまうようになります。まあ頭を掻いてもいいけど尻を見せてはみつともないですよ。では大掾氏を知るためにはまず関東における平氏と源氏の流れをみておく必要があります。ここで平氏も源氏も天皇家の親族が民間に降った時に頂いた姓ですが、一般には源氏は天皇の子か孫、平氏は孫か祖孫などとも言われます。まあこれだと平家より源氏の方が偉そうですね。

また、大掾(だいじょう)というのは職位をあらわしています。その当時の国司の職位は守(かみ、介(すけ)、その下が掾(じょう)といました。大国(延喜式の記載では13ヶ国)と言われた国にのみ大掾と少掾が置かれていました。掾(じょう)の下には目(もく)が置かれていましたが、これも大国は大目、少目が置かれました。石岡には現在も「正上内(しょうじょううち)」などという地名がありますが、これは恐らくこの少掾(しょうじょう)が住んでいた辺りではないかと思っています。

都の大和朝廷(皇族)の収入が困窮し始めたため、常陸国は、上総国・上野国とともに、天長3年(8

26年)以降、皇族が直接統治して税を徴収する親王任国に指定され、親王が国守となりました。一見国としては「上」の国などといわれて偉そうですが、これも皇族にたくさんお金を回すためですから、おだてられただけかもしれません。しかし、この都から遠い常陸国などに皇族の国守は来なくなりしました。また「介」などという身分も次第に単なる位を示す名譽職となっていく、現地では大掾(だいじょう)が一番偉くなつて金も実権も握ってしまつたようです。ですから後にこの大掾職をほしがるものが出てくるのですが、かなり強大な権力を握ってしまつていたために世襲が始まつていったのです。そして職名がその氏族の名前になりました。

A、関東平氏(坂東平氏)の起こり

1、平安時代に桓武天皇の孫(または曾孫)である高望王が平(たいら)の姓をもらい(889年)民間に降つて、上総介(かずきのすけ)として上総(千葉)へやつてきます(898年)

2、その時、国香・良兼・良将という3人の子供を連れてきます。高望王は任期が終了(902年)し、大宰府に西海道の国司として転任となりました。しかし、3人の子供達はこの常陸・上総・下総の地に残り、土地の豪族と手を結んでこの地に土着します。

3、長男国香は筑波の豪族であり、前常陸大掾の源護(みなもとのももご)の娘を妻にむかえ常陸国にその基盤を築いていきます。この国香の子孫が代々常陸国の大掾職を継いで大掾氏を名乗るようになります。(源護も源氏姓ですからこの源氏系列に属すると思われませんが、はっきりしません。)平清盛を代表とする平家と言われたのは、この国香の子孫で伊勢平氏です。

4、次男の良兼は父高望王の上総介の後を継ぎ上総、下総国に勢力を張って行きます。真壁などもこの良兼は勢力を持っていたようです。

5、三男良将(よしまさ)(良持ともいう)はやはり源護の娘婿となり下総の勢力を拡大していきますが、子供の子供の平将門がおこした乱で敗れたため、良将の正当な子孫はいなくなりました。

B、上総・常陸国における源氏の流れ

1、陸奥国の安倍氏との争いが活発となり、1053年に鎮守府將軍に任じられた源頼家が息子(八幡太郎)義家を伴い奥州の清原氏と協力して安倍氏を滅ぼします。(前九年の役)

2、後三年の役では陸奥国の覇者をねらう清原氏を倒すために源義家(八幡太郎)が陸奥守となりやつてきます。そこに義家の弟、(新羅三郎)源義光が戦闘に加わり(1087年)戦いに勝利します。

3、後三年の役が終わり、都に帰つた源義光(新羅三郎)は常陸介に任じられて常陸国に再びやつてきます。そして勢力を拡大していた平国香の子孫(大掾氏)から妻を迎えこの地での地位を築いていきます。しかし、鹿島神宮領域の争いで追放となり次男の源義清(武田冠者と呼ばれる)常陸国勝田付近の武田郷に住んでいたと共に甲斐国に移り、甲斐武田氏の始まりとなります。

4、八幡太郎義家、新羅三郎義光兄弟の間に賀茂次郎源義綱がありますが、ここに跡目を継ぐ子供がいまませんでした(義光の策略で子どもたちも自害し、義綱も流罪となつたという説もあります)。そこで新羅三郎義光の長男、源義業(よしなり)が養子に入ります。

そして常陸国太田の有力豪族の娘を妻に迎え、源義業は妻の里である太田の地にやつて来てここで勢力をはり、戦国時代に常陸国を制した

佐竹氏の祖となつて行きます。

この頃は平氏も源氏も婚姻関係では入り乱れていますので、系図をたどるとどこかで血縁関係が成立しています。

C 千葉氏の祖「平良文」について

高望王とその三人の子供（国香・良兼・良将）が上総にやつてきて常陸・下総などで勢力を拡大していったと書きましたが、もう一人高望王には重要な子供がおります。それが平良文です。一般的には五男といわれています。良文は高望王の側室の子といわれ、高望王が上総・坂東にやつて来た時はまだ幼かったこともあり一緒にやつてきませんでした。

しかし、この良文が後に坂東八平氏（秩父氏、上総氏、千葉氏、中村氏、三浦氏、鎌倉氏など）の祖となり、特に民俗的にも謎とされている千葉氏の祖とみなされています。

高望王の正室の三人の子供は将門の乱でお互いに戦をすることになりますが、良文は戦には加わっていないようです。

坂東（関東）にきた時は、武蔵国村岡（埼玉県熊谷市）に移り住み村岡五郎（五男なので）と呼ばれるようになります。

その後相模国村岡（藤沢市、下総国村岡（下妻市）や千葉県東庄町や小見川町（香取市）にも住んでいたと言われるように多くの領地を得ています。

陸奥守であつた良文は、鎮守府將軍に任じられ（939年、胆沢城にも留まり陸奥国の平定にも力を注ぎます。翌年940年に坂東に戻りその後の秩父、上総、三浦、鎌倉などに勢力を拡大していきました。

千葉氏、三浦氏などもその後の歴史ではかな

り重要な役割を担っています。

D 常陸国大掾氏の簡単な流れ

1、平国香は源護（みなもとのももる）と血縁関係を結んで常陸国に進出し常陸国の大掾（だいじょう）職に任じられます。そして石田（旧明野町）に居を構えます。当時、役人の官庁は国府（現石岡）にありましたから、当時政務を執るためには、国香も筑波山を越えて石岡の地に来ていたと思われませんが、国香が石岡に住んでいたという記録はありません。

2、将門がおこした反乱に対抗し、国香はあえなく戦死してしまいます。何処で亡くなったのかも諸説ありますが、藤代川（現龍ヶ崎）で935年2月に死んだと考えられています。ですから墓も当時住んでいた石田に置かれています。石岡の平福寺にある大きな五輪塔が国香のものという可能性は少ないでしょう。

3、父国香の死を京で聞いた長男の平貞盛は、下野押領使の藤原秀郷（ひでさと）（百足退治伝説で有名な藤太）を味方にひきいれ、940年に平将門を承平・天慶の乱で倒すことに成功します。その後、貞盛は鎮守府將軍・陸奥守を歴任、常陸に多くの所領を得て常陸大掾となります。

4、貞盛の甥であり、養子として大掾氏を継承した平維幹（これとは筑波郡水守（みもり）に住み、後に（990年頃）筑波郡北条の多気山に多気城を築き移り住みます。これが多気大掾氏です。常陸大掾氏の始まりです。

5、それから為幹（ためもと）、繁幹（しげもと）、致幹（むねもと）、直幹、義幹と多気大掾氏が続きます。この間、かなり裕福な氏族として羽振りを利かせていたようで、中央の都からやってきた常陸介なども太刀打ちできないほどだったとも言われています。

6、しかし、鎌倉幕府が成立し、曾我兄弟の仇討ち事件などで疑心暗鬼になっていた源頼朝に、大掾職が欲しい常陸国守護の八田氏（小田氏）鎌倉幕府の御家人でもあったが1193年に「多気大掾に謀反の噂あり」と讒言をします。（実際は北条の町に今でも残される生活のための水路の建設をしたことが謀反の証と見られたようです）これにより鎌倉に呼び出された義幹は大掾職を解かれ失脚し、多気氏は滅びてしまいます。（ただし、系列の氏族はたくさん残ります。芹沢氏などもその一つです。）

7、しかし、その後常陸国では八田氏の勢力が大きくなることを嫌って、大掾職は水戸の吉田氏（平資幹（水戸の馬場に居を構えていたので馬場氏ともいう）に任されることになります。

この吉田氏は前の多気大掾氏と同じ家系の系統ですから、常陸大掾氏という名前は継統されていきます。この吉田氏と行方氏、鹿島氏は兄弟系列です。

この時から大掾氏と小田氏（八田氏）は仲が悪くなっています。

8、（吉田）大掾氏は水戸に城（馬場城＝水戸城）を築き（1198年）、常陸国府（石岡）に通うという二

重生活となります。

1214年鎌倉幕府から府中（現石岡）の地頭職を与えられ、茨城郡の郡衙があった石岡市田島に城を築きます。現在の外城（とじょう）と呼ばれるところです。

9、吉田大掾資幹から7代後の平詮国の時に鎌倉滅亡後足利尊氏について功を挙げ、廻りの脅威から身を守るため現在の石岡小学校の昔国府があった台地に「府中城」を築きます。（1346〜51頃）これは街を含んだ自然の要害を利用した中世の城で、当時としてはかなりすぐれた城でした。

10、それから60数年後の1416年に起きた上杉禪秀の乱で上杉方につき敗北を期し水戸城（馬場城）周辺の所領を没収されてしまいます。しかし、大掾氏は水戸に居座り続けて渡そうとはしませんでした。しかし、府中（石岡）で行われた青屋祭に出かけて留守にしていた時に江戸氏に水戸城を奪われてしまいました。これ以来、大掾氏は根拠を府中（石岡）におくこととなり、江戸氏とは犬猿の仲となつてしまいます。もともと水戸は所領を没収され、江戸氏に与えられていたので仕方ありません。その頃常陸国では「江戸氏」「大掾氏」「小田氏」の三強がしのぎを削るようになります。

大掾氏も江戸氏と対立するときには小田氏と手を組んだり、小田氏と対立するときには江戸氏と手を組んだり各地で紛争が絶えなくなります。そして

あちこちに城や館、砦、要害などを築きます。石岡に府中城（大掾氏）が常陸平氏の棟梁として居を構えています。そして小川城に享禄元年（1528）に小田氏の家臣、園部兼泰が城主となります。1551年に江戸氏や小田氏との係争を繰り返してきた大掾慶幹が死去し（1551年）、江戸氏、小田氏、園部氏（小田派）に対する備えをする必要から、府中城は長男大掾貞国が継ぎ、江戸氏が南下して築いた砦「堅倉砦」に対峙するために園部川の近い所に「竹原城」を築いて（1555年）、四男の義国を守らせ、小田氏に対抗するため三村城を築きます。

そしてそこには7男？常春が城主となります。しかし、この城は1573年（天正元年）2月に、小川の園部氏攻撃に城兵が出かけているすきを小田氏の軍勢に攻め込まれ城は炎上し、常春は自害してしまいます。その後、江戸氏は小川の園部氏とも手を結び、また佐竹氏もこれに加わって府中の大掾氏をせめ、小田氏は佐竹氏に攻められて、1574年（三村城炎上の翌年）に小田氏の拠点土浦城が佐竹氏の攻撃で陥落してしまいます。

それから府中大掾氏が滅ぼされる1590年まで16年。ここでの攻防が続きました。その戦闘や人びとの暮らしはどんなだったのでしょうか。東に園部、北に江戸氏・佐竹氏、南に小田氏やその後やつてきた佐竹派の家臣に囲まれてしまったのです。西の八郷地区は佐竹派の客将太田三楽が片野城におりましたが、これも大掾氏とも姻戚関係を保ちたりしてあまり主だった闘いの記録はありません。そんな中、府中の大掾氏の城主大掾（平貞国）は1577年に戦死してしまいました。後を継いだのはまだ5歳の大掾清幹（きよとも）でした。周りは敵だらけ、そしてその侵入を防ぐために各

地に造られた要塞（砦）。一つ一つ見ていくとこの頃の戦の流れが見て取れるようです。

でも多くがその時代の事をほとんど残しておらず、記録も断片的になっていて切れ切れです。

※この記事は以前ブログに書いたものです。

私の学んだ労音の歴史から… 木下明男

私は1965年労音運動（職場サークルを主体とした音楽運動）に身を投じた。まだ20代の前半で東京の品川区大井町にある日本光学工業株式会社に勤めていた。そのころ職場や会社、社会の諸事情の中で労音のサークル活動に誘われたのでした。サークルの代表として地域活動にも参加し、次第に労音運動に感化されていく。

労音時代に学んだ音楽運動の歴史を思い起こしてみた。東京の各地域から集まった若者たちが「東京労音学校」に参加し、勉強を始めた。その時に学んだテキストから。

第二期（1955年〜1960年）労音の全国体制の確立

この時期の社会情勢と労音運動の特徴点

(1)この時期の社会情勢

1951年9月、日米間で決定された日米安保条約によるサンフランシスコ体制が益々強まり、日本のアメリカによる従属の度合いも強化され、新安保条約の改定（1960年）を目指して政治的、経済的、軍事的、文化的に新安保体制確立が一層、急激に強化された時期でした。1955年インド

ネシアのバンドンで、アジア・アフリカ会議が帝国主義と植民地主義に反対し、アジア・アフリカ諸国の独立を勝ち取る画期的な会議が行われた。この会議では有名な、平和十原則が採血されバンドン声明が発表された。アジア・アフリカの諸国が今後の世界の政治を動かす原動力として集まった最初の出发点でした。アジア・アフリカ会議は植民地主義をなくし民族の独立を勝ち取る政治課題ばかりでなく、アジア・アフリカの民族文化を守り発展させる文化の方針を基本的に打ち出し、翌年にはアジア・アフリカ作家会議がタシケントで行われた。

植民地主義を維持し植民地文化による支配をアジア・アフリカに確立するため、1955年9月タイのラングーンで文化自由会議が開催され、その代表であるナボコフが来日し、日経連の基に労音の対抗団体である音協が成立された。そしてジャズが大量に日本に入ってきたのもこの時期でした。1956年「もし、もし、家出をした娘さん」「故郷じゃ父さん母さんたちが、死ぬほど心配してるだろう」「若いお巡りさん」と、農村出身の青年男女に呼びかける歌を流行らせ、愛される警官のPRに努めた。1958年には人民弾圧の武器、警職法（警察官職務執行法改正案）を国会に提出した。新安保条約を通すために、その準備として国民の権利を奪い、物を言わせない戦前の「オイコラ警官」のファッショ政治を惹こうとしていた。労音が最初に政治と音楽の問題で闘ったのが警職法反対闘争で、音楽専門家が一緒に、音楽会発表の自由を奪うものとして、多くの音楽家が反対を表明した。戦前、オペラを上演するのにも検閲制度のためオペラの台本を警視庁に提出しなければ公演出来ず、また公演中に、バレエのタイツ

はいけない、臍下三寸はダメで楽屋に警官が計っていくという人権侵害が行われていた。丁度同じ法案が出されたので労音も音楽家も一緒に立ち上がった。こうして多くの人民の反対で警職法は廃案になりました。日ソ国交回復（1956年）《アメリカ帝国主義は日中両国人民の共同の敵》であると言う浅沼発言等、社会主義国である中国やソ連との政治・経済・文化交流が一段と前進し、文化の面ではオイストラフをはじめ、ポリシヨイバレエ団・京劇・中国歌舞団が来日し、大きな影響を与えた。

このような国民的な運動の中で、岸内閣は新安保条約をアメリカと一方的に結び1960年に国会で強行採決をした。日本の国民は立ち上がり、アメリカ大統領アイゼンハウアーの訪日を中止させ、その手先である岸内閣を倒した。東京労音は6月安保反対を声明し、音楽家と一緒に「安保反対の民主主義を守る音楽家の会」を組織し闘いました。

(2)第一回全国労音連絡会議の結成と労音運動を分裂させる日本芸能文化センター（今の音協）の設立

1955年9月大津で第一回全国労音連絡会議が開かれた。関西方面で発足した労音運動はその後、東京・中国・四国・九州・山陽・中部・東北と全国規模のなり、前年岡山で東京労音と関西労音連絡会議が合同の全国労音準備会が持たれた。

こうして第一回全国労音連絡会議は全国的に労音運動を拡大発展させることを決議し、同時に入場税反対の決議を行い、全国的協力の基に活動を進めることになり、当時の全国の会員数は12万8000名でした。丁度同年、アジア・アフリカ会

議に対抗し、東南アジア植民地支配を文化面で支えるために、文化自由会議ラングーン会議が開かれ、日本にナボコフが来日し日本の反動勢力との協議のもとに日本芸能文化センター（音協の前身）が日経連の手で作られた。明らかに労音運動やうたごえ運動を潰すことを目的としたもので、全国の企業に「労音はアカだから加入しないように」と呼びかけた。自由文化会議の日本支部は国際文化交流協会と言う形で、外務大臣に予定されていた藤山愛一郎が会長となり、アメリカ大統領資金（CANVA II アンタ）の援助の基に、アメリカの植民地文を輸入する日本側窓口となり、日本国内の組織化は日本芸能文化センターが行うというものでした。大阪では音楽文化協会（音協）日本芸能文化センター大阪支部の名のもとに関経連が組織し、「働く人に安くて良い音楽を」「生産性の向上と各社における芸能文化の振興」「純粋中正なる芸術」をスローガンに、理事長に元住友銀行頭取、大阪テレビ社長、鈴木剛が就任。大阪労音の入会金100円に対し、音協は50円、会費は100円に対し、75円と労音の切り崩しに大々的に乗り出した。つまり10年前、外国勢力的、主にアメリカの援助の基に日本の勤労者を文化的に支配し、労音運動を押し潰し分裂させるために、日本の反動勢力が公然と行ってきた活動はその後の活動でも明らかでした。

(3)第二期の東京労音の主な活動

―三つのスローガンはどう実践されたか―

①一人の会員が一人の会員を増やそう。

「白鳥の湖」例会で六千名会員を拡大

創立一年で一万八千名の会員を拡大した東京労音は、会員のオペラやバレエを見たいと言う要求を実現するために、貝谷バレエ団の白鳥の湖を取

り上げる事になった。委員会では本格的バレエやオペラは初めてで、経費も掛かる等の点で大討論となった。その当時の会員数では、バレエは150円の会費が実質的にかかり、勤労者が負担する額としては少し高く、どうしたら良いかが討議の中心となった。それでは会員一人一人の会員を増やし、会員の拡大によって会費を安くしようと言う意見に纏まり、五千名の会員拡大が実現すれば130円で聞く事が出来るとの結論に至り、サークルで会員拡大に一人一人が動き、こうして六千名の会員拡大に成功し、財政的に赤字を出さず大成功に終わった。この経験は「良い音楽を安く多くの人に」のスローガンを具体的に実践し成功させた良い経験となり、会員の力とサークルの力こそ、労音を発展させる原動力であることを経験の中から実証した。この経験は、今日まで会員拡大運動の基本になっている。

②「企画運営は会員の手で」「国民音楽を育成創造しよう」

(a) ベートーベンの第九、ショスタコヴィツチの森の歌の大合唱を通じて日本の歌を東京労音の創立一周年記念として行われた。会員の合唱によるベートーベン第九交響曲”は会員の手による例会(共立講堂約2400名収容で8回)として、画期的な意義を持っていた。合唱に参加した会員は千名に達し、約一割の会員が例会づくりに加わったことになった。例会最終日には、会場で一人の会員が立ち上がり「今まで何回も第九を聞いたが、こんな素晴らしい第九は初めて、合唱団に拍手を送ろう」と訴え、会場は拍手の嵐に包まれた。この勤労者による第九は、当時の日本では初めての試みでした。

二周年記念としては、社会主義の建設と自然改造計画をうたい上げたショスタコヴィツチの「森の歌」が企画され、一年間の合唱活動の中で二千人の会員が舞台上がり、旧国技館の国際スタジアムに日本一の舞台が作られ、音響から会場の莫座敷きまですべて会員の手で行われた。一万人を収容できるこの例会の帰りは、労音の会員のうたごえで電車が満員になるありさまで、商業新聞にも三面のトップに大きく報道され、当時「森の歌」が聞けたものです。この二つの大合唱運動を通じて、外国の作品ばかりでなく、日本の歌、我々働く者の生活をうたった歌をと言う要求が迸るように出て「人間を返せ」を作る運動へと発展した。

(b) 年間企画方針決まる。例会の選択制、オーディション等新しい企画方針の確立。

三年目の1956年第四回東京労音総会は会員が四万人に拡大し、新しい例会方針を打ち出した。一つは例会が毎月毎月小刻みに立てるのでなく、サークルで例会要求の討議を起こし、地域会議で集約して、一年間の例会内容を決定する年間企画の方針が出される、この方針は会員の要求例会を組織し、長期の見通しを持った活動で出来る保証を作り上げた意味で全国の労音運動に大きな影響を与えた。また会員が拡大し、毎月一つの例会を十数回も繰り返すことは不可能に近く(例えば木琴の例会を四万人の会員に聞かせている)演奏家からも不満が起き、共立講堂の火災により会場難(当時の東京では、日比谷公会堂・日本青年館・共立講堂)にあり、各区の区民会館を使用する等の条件が重なり、会員の多様な音楽要求を満たすために現在のような例会選択制度が確立した。この事は共立講堂火災による一時

的会員減少を克服し、新しい会員を拡大することに役立ち、音楽の内容を多様に例会で行う条件を作り上げた。

1957年には、労音の方針と運営で初めて自主製作のオペラ「椿姫」が上演され、労音でしか出来ない内容豊かなものになり、音楽家同士の交流が促進された。この経験を活かし1959年にはリゴレット例会に、オーディションを行い、新人を抜擢し大きな反響を呼んだ。成田絵智子・中沢桂・天野秋雄・小田清などその後労音運動に積極的に協力し、音楽界の第一線で活躍している。

1959年には軽音楽が、1960年には邦楽が初めて取り上げられる等今まで外国の作品、特にクラシック音楽中心に進められた労音運動が日本の伝統音楽や大衆音楽を取り上げ、日本の音楽を進めるうえで大きな役割を果たすようになってきた。つまりこの時期は会員の音楽要求を基礎に労音運動の経験の中から国民音楽を創造する組織的準備の時期と言う事が出来る。

(c) 海外交流とサークル、地域の音楽運動の発展

1955年2月、日本の勤労者の音楽要求にこたえてソ連の世界的バイオリニスト、オISTRAフが来日した。まだ日ソの国交が回復されていない時期で大きな困難もあったが、勤労者の社会主義文化に対する要求は強く、日本の音楽運動に大きな影響を与えた。しかし興行主が音楽会主催であったため(法務省は一定のものにしか許可を出さない)入場料が高く、とても勤労者が聞ける料金ではありません。委員会はオISTRAフ対策委員会を作り署名運動を起こし、短期間で一万人の署名を集める運動の結果、体育館で100円の低料金

でオイストラフを聴く事が出来た。海外の音楽文化に接したいと言う会員の要求は高く、国際的な民主組織を通じて海外交流を実現するために、1957年モスクワの世界青年学生平和友好祭に東京労音の代表が初めて参加し、翌年第一回文化施設としてソ連から、バイオリニストのシコリニコワが来日し、大成功を収めた。その後、キューバ・中国・ラテンアメリカ等の交流が行われた。

1955年には労音アンサンブル（その後の新響の前身）が会員の創意で生まれ、毎月一回の例会だけでなく、日常的にサークル、地域で音楽活動をしたなどの要求が高まり、ベートーベン第九合唱の後には、合唱講座が持たれ、他にギターやマンドリン等の音楽講座が持たれた。当時、サークルや地域で行われていた音楽活動の中心は、合唱とレコードコンサートが中心だった。労音からレコードアンプの貸し出しが盛んに行われた、ある地域では会員を集めるためにレコードコンサートを開き、集まったところで地域会議に切り替えたところ、批判が集中し大失敗をした。このような経験の中から、サークル・地域の音楽要求に奉仕することが重要な課題であることが解った。

(d) 不当な入場税に反対する運動 運動の経過

1956年3月国税庁長官へ東京労音の質問書提出
1957年3月人格なき社団に法人税の課税（法人税法の改悪）

1958年5月入場税・法人税債務不存在の確認訴訟（全国労音）

1962年4月国税通則法の成立

1963年7月入場税撤廃100万人署名運動

1963年5月国税庁が全国労音に入場税、法人税を

一方手に通告決定

1958年6月中旬、九州労音に税務署不当差し押さえ始まる

1958年6月藤原義江、千田是也が労音、労演への不当課税への抗議記者会見

1958年7月総評大会で労音、労演への不当課税反対決議

1964年1月国税局が労音への課税券面課税（会費全額）にするという一方的決定

1964年東京労音に差し押さえ始まる

1964年区議会請願始まる

1958年2月、共立講堂（東京労音2月、東京交響楽団例会）の火災により各区の公民館を例会場として使用した。その中で板橋区民会館では、板橋税務署より券面課税の納税を通達により強要。東京労音は創立以来、経費課税の適用を受けていたが券面課税だと映画館並みに例会の整理券の裏に券印し、会費全額に入場税が掛けられるばかりでなく、例会前に入場税を支払う制度（予約制度）になっていたもので、経済的理由ばかりでなく、労音の制度そのものの再検討を突き付けられた結果となり、板橋税務署の強制を拒否して闘った。翌年の3月、東京労音は国税庁長官に宛、質問書を提出。要約すると

イ・労音は法人でも自然人でもなく、人格なき社団で法律上（入場税法上）納税義務がない事。

憲法26条に反する憲法違反である。

ロ・板橋税務署が勝手に入場税法を解釈し、入場税法第7条（経費課税）を適用せず券面課税を労音に適用したことは違法である事。

ハ・入場税法を板橋税務署が守らず国税庁通達によつて納税者を強制したことは違法であり、通達は行政庁の内部施行要綱であり納税者を

法律的拘束できるものはないこと。

一年後に回答が来て。ロ項については板橋税務署の間違いを認めたものの、イ項については労音は当事者能力（契約等の取引をすることができる）があり、社会習慣上納税義務があると解釈すると言う内容だった。

回答が一年も遅れた原因は、当時の国税庁長官が初代の長官に相談し、うっかりした回答すると大変なので、時間を稼ぐ事になったようです。最初は素朴な会員の要求から出発し、入場税そのものの不当性、音楽運動を圧迫するものとして闘う方向が明らかになった。

注経費課税は、入場税法の第1条に「入場料金を領収したとみなす場合」となっており、入場料金を取らなかつた催物に対して入場税を取ると言う、メチャクチャな法律です。昭和55年前進座が地域で実行委員会方式で公演をやった時、経済的な面から進歩的文化運動を押し潰すために作られた法律。

1957年4月には法人税法を改悪し、「法人に非ざる社団または財団で代表者の定があり、かつ収益事業（継続して事業場を設けてなすものに限る）を営むものに法人税を課する」法人税法第1条第2項を加えた。法人でないものに法人税を課するというのですから無理な話です。これは明らかに労音を意識した、労音から税金を徴収し経済的に破壊を狙った意図を持ったものです。このような闘いを通じ、1958年5月全国労音連絡会議で入場税・法人税の債務不存在の確認訴訟を起こした。

いままでの入場税は違法なもので返してもいい。

・入場税・法人税は憲法違反であり税法上納税義務はない。

の二点です。

訴訟に訴えると同時に、入場税撤廃の国会請願、各都道府県市町村議会への請願、共闘体制を強め、労音の率先的な役割であらゆる音楽舞踊団体を含めた入場税撤廃委員会が結成された。労音の過去二年間の闘いは、広範な人々に入場税の不当性が受け止められ、闘いの輪が広がっている。

(4) 安保反対闘争と東京世界音楽祭反対運動

1959年〜60年の新安保条約強行批准反対運動は、未曾有の民族的高まりとなり、平和を愛する全国民が安保闘争に立ち上がった。文化人も勤労者と共に隊伍を組み、音楽家は「民主主義を守る音楽家の会」を結成して立ち上がった。新安保条約成立後、池田内閣の誕生と共に日本は益々戦争への道を進み、浅沼事件・嶋中事件などのテロ行為が相次いだ。このような情勢の基に行われた「1961年東京世界音楽祭」は、反動勢力がアメリカのドルの力を背景に、国際的な規模で日本の民主的な音楽運動に加えた、初めての、而

も大掛かりな攻撃です。それはアメリカの国際支配体制の出先機関「文化自由会議(CFC)」の直接の指図の基に、日本音楽家の主体性を一切無視して進められた。勿論社会主義諸国は、完全にボイコットされ、また、音楽内容から見ても、12音技法、電子音楽、ミュージックコンクレートなどを提唱する「20世紀音楽」の主張を巧みに盛りこむ一方、日本の伝統音楽を観光的に取り上げ、聴衆の要求は全く顧みられません。音楽を政治支配の道具にしようという意図は当初から露骨なまでに示されていた。こうして日本の全ての音楽家は、好むと好まざるにかかわらず、音楽を通して鋭く政治の前に対決を迫られたものです。この攻撃の前に、

日本の音楽運動の正しい在り方について真剣に考えざるを得ませんでした。これは日本の音楽運動にとって歴史的な時期で、先に国民的な安保闘争を闘った多くの民主的な音楽家と勤労者は、相携えて一斉に一大反対運動を展開した。

1960年11月、第6回全国労音連絡会議が「東京世界音楽祭反対声明」を発表したのを契機に、相次いで民主団体、文化団体が同音楽祭の開催反対を表明し、こうした力が遂に世論を動かし、聴衆から浮き上がって同音楽祭は惨めな失敗に終わった。しかしこの一連の闘いは、私たち政治と文化、政治と音楽の断ち難い結びつきをまざまざと見せつけた。音楽・文化を通しての反動的な政治支配が後も様々に形を変えて我々に襲い掛かって来るであろうことは、警戒心を高めると共に、其れとの闘いなしに、日本の音楽運動の正しい発展はあり得ないこと、これが反対運動を通して我々が掴んだ教訓です。

※ 次回は、第三期(1961年から1965年) 労音運動の基本任務確立と実践の時間からです。

つれてってあげるね

伊東弓子

野上病院を出て、いつの間にか右へ曲がり、歩き出した。その促真つすぐ歩いて行くことにした。陽ざしは強く、木立はなく一層暑さを感じるが、古い道ということに気持ちちが癒される思いで歩いて行つた。寺が五ヶ寺あった。どの寺も墓を抱えている。入口の一角には水汲み場、掃除用具などきちんと揃っていた。境内には大木、古木はなく

紫陽花、草々が花をつけていた。訪れる人もいるのだろう、堂の前には花もあげられている。亀城の近くに来たことを感じ、清水病院の存在を確かめてみたが知る人はいなかった。明治四十二年、父が生まれた年、お婆ちゃん胃潰瘍になって入院した病院と聞いていたので確かめたかった。

百年以上も前のことだ。「高田保」を称える記念碑の除幕式に参加した青春の日の椎の木の見える広場、娘と合い孫と遊んだ、何かもの悲しい思いを写していたあの日の堀を横切って、等覚寺へ向かった。

この通りは、水戸海道(江戸海道とよばれてた以前の繁華街だ。参道は前より広くなっていた。参道に古保けた小さな店が軒を並べていた。店を出入りしている男や女の姿が生き生きしていたのを幼い私にも感じられた。今思うに終戦直後の土浦の町の一ページだったと思う。

山門を潜ると境内は木々で覆われている。木々の枝を渡ってくる風は懐かしさや記憶を思い起こしてくれた。正面は本堂、松の枝の間から昔と変わらない姿が見えた。新しくなった庫裏は右奥にある。山門右傍に鐘突き堂があり、その前に、小田城からこの寺へ移った歴史、鐘は国の重要文化財である謂れなどを刻んだ立札があった。横に延びた松の枝が影を落とす下にゆっくり座り込んだ。私の記憶と、ご先祖の眠るこの寺への思いを誰かに語りたい気持ちを膨らませていた。

お婆ちゃんの実家、等覚寺の思い出は幾つかある。父と小学生の私が行った日の事が多い。多分お盆の夜だったろう。大勢の人とか見芝居を見ていた。「蜘蛛の糸」の一場面、吾一人助かろうとするカンダタの顔が目には焼き付いている。広い台所に幅広い樋があつて、綺麗な水が流れていた。そ

の水を汲んで使っている。そこに西瓜が冷やしてあったのを何か期待して見ていた私。汽車を降りてホームを出ると、人力車があった。乗る人はいないが、車夫もいなかった。

私と父は歩いて行つた。等覚寺に行く町角の簞笥屋の角に天水桶がある。中を覗き込んでいる私があった。土浦へ行って高浜から歩いて帰ってきたあの日、父と私は、どんな話をしながら歩いてきたのだろう。高崎の坂を上りきると左側に葡萄畑が広がっている。番小屋の近くから猫が出てきた。父はこっちは道でだめだ。早くお帰りと小屋の方へ投げた。一里の道をよく歩いた。

中学校の頃、私の用事で父と行つた時のことだった。私は傍で聞いていたが内容までは覚えていない。お婆さんは蠅が飛んでくるとピシヤピシヤと蠅を叩いていた。何とも不思議な光景だった。父は従兄弟の住職が亡くなった時、とても落胆していたことを覚えている。あんな父の姿を見たことはなかった。

こうして書いていると、お婆ちゃんの実家へ行ったのは、数える位しかないのだと、縁というものに驚きながら、広い繁りの中にいる自分を見つけて出した。

活動家の義理の姉は、現住職と同じように活動をしていたと聞いた。等覚寺にお嫁に来た人が「玉里の話をして聞いたことがあった」とか、若い時行つた八郷の大覚寺の奥さんから等覚寺の話を聞いたり、御留川を歩く会で一緒に話した行方の寺の奥さんも大覚寺との係りなど話してくださいました。

この歳になって改めて多くの人に包まれている幸せを知った思いだ。再従兄弟の現住職さんにお会いしたこともあるが「ああ玉里の方ね」と、快

く迎えて頂いたことも目に見えない、遠い昔からのものを感じていた。

等覚寺で産まれたお婆ちゃん、名前を「由里」と言った。明治の初めだったから百四十年前のこと。お兄さんがいて、その下に六人の女の子の長女だった。子供から娘時代は土浦の中心地で、沢山の人達と遊び、学び豊かな日を送っていたことだろう。一足先に廃寺を建て直す為に玉里に来ていたお爺ちゃんと結婚。慣れない土地で知る人もない所での生活が始まった。

寺の復興、荒れ地の開墾、壊れた家の修理、散らばつたお檀家のまとめ、食べていくための耕作、三男二女の子育てとそれは眠る間もなく働き、動かねばならなかっただろう。今とは違うすべて人力の生活だったのだから、想像の付かない程の苦労だったと思う。その上老いてからも辛いことがあつたのをどう乗り越えてきたのだろう。お爺ちゃんが亡くなって淋しかったところへ、二人の赤子を亡くして落ち込んでいたであろう父と母が戻ってきた。父は十三才でお爺ちゃんの実家の大垣へ行つて故郷を離れていたから久しぶりの帰郷。

母は農村での生活が始まった。慣れてきた頃、父母は私の上の子を亡くし、私は大怪我をし、やがて父は招集された。女、子供、老人の生活が始まったのだ。老いていくお婆ちゃんは次々に苦が押し寄せた。それでも強かつたお婆ちゃん。戦争がすんで父も帰ってきたのは家族にとって、どんなに幸せを得られたことか。食料の遣り繰りにも精が出たという。母が布団の片づけをしてあげると「重くて重くて上げられなくなってね、ありがとう」と喜んだそうだ。

押入れの奥にあつた佛さまを出してあげた時も「これはお嫁に来る時持ってきたものだけ一度

も拝みもせず、押し込んだままだったのよ。よかった、ありがとう」と言いながら毎日お参りしていたという。どんなにか忙しい五十年を過ごしてきたのだろうかと思はれる。

そして翌春、菜の花の咲く頃、七十二才の身はお爺ちゃんの所に旅立っていった。私は小学一年生の三学期、お通夜の夜のことをよく覚えている。大勢の人がいた。叔母（お婆ちゃんの妹）さん達が「こんなに小さくなつちやつた」と泣き崩れていた。

私とお婆ちゃんは六年しか一緒にいなかったけれど、幼いなりにいくつかの思い出がある。西陽のさす板の間で折鶴を折ってもらつた。裏山の丈が揺れていた。玉葱の皮で島田まげの人形を作つて貰つて人形遊びをした。母の言うことを聞かずに、お婆ちゃんに連れて行つてもらつた「せんすけさん」の家に行つたあの道、後ろめたさに何度も振り返つた。「前のしんやのおけいさんち」にも回覧板をもつて行つた。お手玉もやつた。

「明治十年の戦争で、切腹された父上の
お墓参りにまいります。お墓の前で手を合わせ
南無阿弥陀仏と拝みます。拝んだ後から幽霊が
ふんわりふんわりふんわりこ」

この歌もよく一緒に唄つたりした。記憶が残っている事は少ないけれど、目に見えないもの、形のないものが私の心を豊かに育ててくれていることだろうと思う。

常磐線が台地や林から出ると、高浜の水田地帯が広がる。右の奥に高崎半島が延びている玉里出船だ。お婆ちゃんは、車内から見ても思つたそう。「ああ、あそこへ戻つて行くんだね」と一人呟いたそう。心の中の深い思いはどんなだったのだろう。私もそこに差し掛かると、お婆ちゃ

んの想いをどこまで理解出来るだろうか、遠く玉里を眺めるのが常だ。

一族に声をかけ、小田の地、小田城、北条の地あたりから、等覚寺にお参りに行こう。後継者がなく、新しい住職さんがこられるそうだ。「小田」の名がなくなることになる。

今年のお盆さんもうすぐ来るから、お婆ちゃんを連れて行ってあげよう。お婆ちゃんの家族は遠くなっても、みんな来ているからね。そんなことを考えながら、帰りは桜川に添って出来た色町といわれた通りを歩いて帰った。

石岡市指定文化財(五)

兼平智恵子

石岡のおおにんぎょう

作詞 小松崎 章

作曲 岡田 佳久

編曲 山口 正光

唄 松崎 義幸

一、天明(てんめい)ごろのむかしから

三差路わきの産土で

鎮座を誇る 大人形

別のよび名は ダイダラボッチ

二、杉の葉総(はぶき)で身を覆い

腰には刀 手に槍の

真顔が怖い 大人形

妙な姿は 歴史のつづき

三、老人方(おいひとがた)のはなしでは

疫病よけや 厄よけの
まじない像が 大人形
験(げん)を秘めたる 習俗そぼく

♪ 優しいメロディに乗って、ゆったりとした素朴な声で、どこか懐かしい！心落ち着く唄に聞き入ってしまいます。

これは石岡市井関、代田地区の代田の大人形、仲郷地区の梶和崎の大人形、長者峰の大人形、古酒(ふるさき)の大人形、の四体を歌っています。

作詞の小松崎様は梶和崎の大人形製作に加わっていて、この大人形の歴史と由来を広く伝えたいと熱く語ってくれました。そして、「この歌は、これまでこの大人形製作を継承してきた地区の人たちに敬意を込めてつくりました」とも話されていました。

これらの大人形に関する古文書や内容をまとめて示した実録書が見つからず、小松崎様は昭和二十年代から見聞してきた梶和崎の大人形行事の記憶や古老から聞いた話や口伝を参考にして、「石岡市の大人形」小松崎章著を発行されました。

この小松崎様の著書を参考にさせて頂き四体の大人形をご紹介します。

大人形作りは江戸時代の天明年間に起きた、天明の大飢饉(二七八二―二七八七)後から始まったといわれ、「疫病根絶」「魔よけ」「厄払い」そして災害の入る事を防ぐために、毎年八月十六日に藁や杉等を使って作られ、地区の入口に置かれ一年間皆さんの安穩無事を守っている。

○代田の大人形(通称・ダイダラボッチ)

無形民俗

平成十六、三・二十五

四体の内、唯一石岡市指定文化財になっています。置かれている場所は、当会報六月号でも紹介しました石岡の高浜神社より愛郷橋を渡り、道なりに前進、途中カーブ、上り、下りの坂道が有り、やがて関川小学校を右にして通り過ぎると間もなく右カーブ、下りた左側に置かれています。今年もお盆明けの八月十六日に新しく作りかえられます。当日は午後三時頃から十人余りの男性が集まり、一年間据え置かれた人形を解体し、近く

の空き地で燃やします。

新しく藁で作られた手、足、胸、臍、男根、鉢巻、竹と杉の古木を削って槍と大刀、小刀作製。ビニールの袋で覆われた白紙の裏面にマジックで描かれた恐ろしい形相の顔。

当日は見学に来て下さいと代田の区長さん。

見学の折には是非路上駐車でなく、大人形より先に進み、関川・代田交差点を越え、少し走るとガードレールが見えてきます。間もなく右折、右側は井関農村公園、そこに駐車して下さいの事でした。

そこには、トイレがあり、代田の大人形まで戻ること徒歩で三、四分のところですよ。

○梶和崎の大人形

置かれている場所は、代田の大人形より関川・代田交差点を越え前進すると左右一帯水田が広がります。ほどなくして丁字路左側に鎮座しています。

製作日は他の大人形より先頭きつて八月の第一日曜日、今年は八月五日午後一時から三時頃迄ということでした。

大人形行事の当日は輪番制により担当になった

責任者は藁や荒縄といった材料を用意しておき、さらに皆で青杉葉や青竹を採ってくる。一年間睨みをきかせた大人形を解体、焼却し、新しい大人形の製作に入る。芯木を立て、胴体、手足の指(三十本、円俵、鉢巻きの太縄作り、顔描きなどを同時にすすめ、全部あわせて一体化、杉葉を全身に差して覆い完成させる。当会報が皆様のお手元に届く頃は睨みをきかせていることでしょう。

○古酒(ふるさき)の大人形

置かれている場所は、代田の大人形の時の駐車場、井関農村公園から右折、間もなく緩やかな上り坂をあがり、平らになった左側にありましたが、七月中頃伺った時は、取り払われ見る事ができませんでした。近くにいた方に伺いましたところ、後継者不足、材料不足等により惜しくも終了する事になりましたという事でした。

○長者峰の大人形

古酒の大人形のあったところから、更に前進、間もなく二俣、左側を前進、ほどなくしてゆるやかな下り坂右側カーブ、この下り坂、中間辺りが空き地になっており、こちらの場所が大人形の製作するところです。空地過ぎたところ、門構えのある坂本様の前を通り、山道に入るような、すぐの右側に置かれてありました。

製作日は八月十六日午後一時より三時頃まで、当番者が材料と小麦藁を用意、体芯部以外の手足、鉢巻き、袂俵で表現される。胸、臍、刀の鐔、槍の筥などの部品が小麦藁で作られる。恐ろしい形相した顔はブリキ板に描かれ、他の人形より大きく三メートルあり、最も威圧感がある。全身に杉の小枝を刺し、腰には木製の刀が一本さされる。

他と違うのは男根がつけられない。理由としては近くに「金精大明神」の石祠が祀られている事が関係するものと考えられているが、由来や伝承がない為詳細について不明ということでした。

小松崎様は大人形の行事の継承・継続は、集落住人の絆を保持する上で大変意義のある事と強くおっしゃっていました。

自然災害の多い昨今、地域の絆が強く求められています。

・母九十八歳 また小さくなって

智恵子

異常気象

小林幸枝

二〇一八年に入って気象の異常が多くなったような気がします。

異常気象の原因は主に人間社会が排出する温室効果ガスに関係していると言われています。地球が温暖化すると地球全体が温かくなるだけかと思っていたら、夏と冬の差が極端となり、猛烈な部分的寒波と長い酷暑の夏になってしまうようです。春夏秋冬の四季が無くなり、人間の気性の変化も出てきて、人類滅亡へ急加速に進んでいくのではないかと心配します。

今年に入って大雪の記録が首都圏でも記録されましたが、突然に春になって順番に咲いていく花や草木の全部が一緒になってしまった。あつという間の春が終わったら、急に夏になってしまった。

夏になったと思ったら、今までに経験しないような豪雨がやって来て西日本に大きな被害を及ぼした。その復旧作業の終わらない中に、今度は台風

12号がやって来て、北へ抜けるのではなく東海から西に移動していった。どうなっているんだろうか。

私の友人が岡山に住んでいて、台風12号の洪水・土砂災害を心配したが、幸いなことに皆無事であった。

ボランティアの人達のが沢山集まって来てくださり有難かったそう。しかし、災害の片づけは未だ未だ進まず、この夏の酷暑の中でどこまで進められるのか心配なことです。

私達は耳が聞こえない家族なので、身の安全を守る為に常に避難の準備をしています。猫、犬達もケージに入れてつれて避難できるように準備しておりますが、こうした準備が無駄になることを願うばかりです。

今年の災害を見ると、避難指示などがあっても今までの経験からまだ大丈夫だろうと考えてはいけないようです。石岡は、これまで大きな災害がなかったなどと安心してはいけません。自然との付き合いを考え置くことが必要なのだと、酷暑の中で思っています。

これからが夏本番です。想像を超える暑さが来るかもしれません。過信や何とかなるを捨てて、自分を大切にしましょう。

パチンコ考現学 ㊦ 菊地孝夫

本題から大分ずれてしまったので、ここらで遊戯のことに戻ろう。

誰もが勝ちたいと思っていくわけだが、なかなかそううまくはいかない。

パチンコ玉が入賞口を通過した瞬間に当たりはずれの判定が行われる。

これまた誤解があるようなのが、大当たりの確率である。よく99分の1とか319分の1の機種だとか表示されている。

メーカーから出荷された時点ではもともと低い確率である。それを、店舗で右記の確率に設定する訳である。そして、台によっては50分の1とか200分の1とかに設定する。

時々営業を休むのは新台の入れ替えと同時にホストコンピュータのデータをチェックして、設定のとおり台がちやんと働いたか調べるのである。パチンコ玉の一発一発に至るまで詳細なデータが記録されている。

最新のコンピュータに人間が勝てないのは当たり前。時折勝つのは全く“運”と言つてよい。

昔は朝から一日中出っ放しとかいう時代もあった。一日五十万の儲けなど当たり前だった。勿論損するのもその何倍かであった。あまりにも射幸性が高すぎるというので、しばしば取り締まられた。バブル期のことである。

パチンコのシミュレーションゲームがあつて、パソコンの画面上で本物とそっくりに遊べるものがあつた。釘の向きや設定を変えることが出来た。そこで1分の1に設定しても二回に一回になることもある。

確率と云うのはあくまで目安であつて、数十億回やれば1分の1に限りなく近づくと云うことであつて百パーセントではない。

「出ない、出ない」とぶつぶついうが、台の選び方を間違えたのだ。

二十年ほど前、パチプロと親しくなったことがある。見てみるとよく台を観察している。そして毎日朝一番で来て、選んだ台で打っている。ほぼ毎回勝つのだが、たまには負けることもある。そんな時はさつさと引き上げる。大負けはしない。ある時、彼が遅く来たことがある。私に「今日はどれがいい？」と聞くので、二・三台教えた。しばらくして、缶ジュースを持ってきた。どうやら勝つたらしい。それ以来親しくなった。

といっても、出る台を教えてくれるわけではない。ならんでやっていると世間話をするだけである。パチプロと親しげにしているので店員さんは私もてつきりプロだと思つていたらしい。私が只のサラリーマンだと判つてびっくりしたらしい。

毎日通えばそのうちの辺がいいかわかったものである。プロはそれなりに努力している。

現在の客層は以前と大きく変化している。何より女性客が増加した。日立市には、有名な女性建築家の設計になる店舗が登場した。内装を一変して、床や壁に木材を多用した。キンキンと響く金属音を吸収する為である。景品も女性向けのモノを揃え、冷蔵ロッカーの無償貸し出しも導入した。買い物帰りの主婦が気軽に立ち寄れるようにした。このアイディアは見事に当たり、テレビにも取り上げられ、建築の賞も受賞した。

老人の客も増えた。家で孤独に過ごすより、ここに来れば同世代の人々がいるし、いつの間にか親しくなり話し相手が出来た。杖を突いたり、車いすの人もいる。大体の店舗には食堂が付属していて、一日中遊ぶことができる。

今日、社会福祉と称して、老人施設に收容するのが主流になっているが、そんな限られた空間に人を閉じ込めてしまうより、様々な人と出会うパチンコ屋のようなところの方がずっと人間的な空間だという気がする。パチンコ店が期せずして貧弱なこの国の福祉の一端を担っているのである。

【風の談話室】

《読者投稿》

やささと暮らし（18）

さと女

夏を迎え、我が家の庭は凄惨な事に。頑張っただけご褒美に楽しませてくれる。暑い日も、雨の日も、日々畑に庭に出て土とお話を！ 今年の夏も色々。

●雨模様

半夏生（はんげしょう）の葉が変わり始める。緑の葉と白の葉とのコントラストがとてもキレイ。何年前かに3本植えたのが、いつの間にか沢山に増えていた。花葉つばの生きが長いので当分楽しめる。アジサイもスカシユリも咲き雨がとても良く似合い、小雨に打たれてイキイキしています。

鬱陶しい雨が降り続き植物たちには喜びの雨、タップリ水を吸って生き生きしている。特に紫陽花はつやつや輝き、雑草はそれ以上に喜んでいて、大地に深く根を張り勢力を拡大している。そんな雑草と闘っていると色々なものに遭遇、蛇と見間違え程大きなミミズにドキッとす。一番嫌なのはムカデ、幸い今年はまだ遭遇していない、スズ

メ・蜂には2度も刺されたことがあり、病院の世話になった。

そんな中、癒されホッとするのは花との出会い、昨日は大好きなカラーの花が、インドハマユウもキキョウの花も咲き始め、草に埋もれていてはかわいそう、頑張らなければ！ ホタルブクロは、梅雨にしっかりと咲いている花。釣り鐘状に咲く花、家の周りを歩いてと何種類かが咲いている。薄紫色の九重と八重の花は増えているが、白とピンクの八重は中々増えない。

雨がポツポツ落ちてきたので、夕方の水やりはしなくてもいい？と思っていたらポツンで終わってしまう。気分直しにコロちゃんと散歩に行く。ソロソロ向日葵が咲く頃かと思ひ少し遠回り、背丈以上伸びた向日葵は見事に咲いていた。だが、コロちゃんはバテ気味、去年まではどんどん歩いたのに、「ハアハア、ゼイゼイ」途中10キログラムもあるコロちゃんを抱えて歩いたので、大汗を掻いたが、向日葵は元気に！

●実りの楽しみ

小枝がしなり倒れそうになるほど実っているブルーベリー。この木は父が植えたのだが、実り始めたのは亡くなってから。今では見上げる程大きく成長している。食べごろの実を見て、夫が採取に勇んで出て行ったが、(私は不安だった。半ズボンに半そで、あまりにも無防備)暫くして戻ってきたが、策にはほんの少ししか積んでいない、代りに手や足がやぶ蚊にやられ、ボコボコに腫れていた。これに凝りて、もうブルーベリー摘みはしないかもしれないなあ…？

夕方コロちゃんと散歩の途中、ザクロの樹を見つけた。数週間前、綺麗なオレンジの花を咲かせ

ていたが今日は可愛い実になっていた。10月末には真つ赤なつぶつぶの甘酸っぱい実を沢山つけるでしょう。私の部落で、只1件のタバコ農家さん。早春の時期に1本1本植えられたタバコの苗が、今では背丈を超すほどに成長している。これから暑くなる時期に、横芽欠きや花積み頭、早朝からの作業が始まる。そして1枚1枚丹念に葉を積む作業も始まったようです。ポキッポキッという音がリズムカルに聞こえ、何枚か重ねて肩にかけ軽トラに載せて運ぶ、重労働の作業が始まる。暑い夏がやって来る。

アレエ？庭にモクレンの花が。確か春にも咲いていた筈だけど。四季咲きだったのかな？あまりの暑さに私の頭は思考能力低下、そして隣の牛舎の子牛は2頭目が死んだ。度々水分を与えたり冷やしたりしていたがこの暑さには勝てなかったらしい。テレビからは危険な暑さです、明日も今日以上ですと盛んに言っている。

●昔の仲間

大分県からお客様、ギター文化馆でのイベントに参加した後、田舎家に宿泊となった。FB友のYさんとは、ギター館で2度程会ったことがある(Yさんは判らないと思う)Aちゃんとは東京での労音時代(20歳の頃)からの友人。この二人が九州の大分県でギター仲間だったとは驚きです。世間は狭いですね、色々な繋がりを感じてしまいます。小雨降る中、朝早くからAちゃんとあしかがフラワーパークへ、若かりし頃の仲間10人と5年ぶりの再会。会った途端気分は青春時代、みんなではしやぎまわった。館内はとにかく言葉に言い尽くせないほど素晴らしく感嘆の声をもしつぱなでした。其の後織姫神社へ(220の階段が参道)息を切らし

て昇り、足をガクガクさせて降りた。5年前は震災と原発で行方不明だったモモちゃんとの再会の会、場所は八郷だった。其のとき1番元気だった佐恵子さんが今年亡くなった。夜は彼女を偲んで思い出などを語りあう。

宿泊したのは、群馬県太田市藪塚温泉。木枯し紋次郎のふる里三日月村がある。森林浴を楽しみながら江戸時代の情景の再現された街道を歩いた。その一角にはスネークセンターもある。毒蛇の研究を目的としている他公開もしており初体験ニシキヘビを抱いた人もいた。キヤーキヤー騒ぎながら時間は過ぎ、昼食後別れの時間が、今度いつ会えるのか、寂しさが…。非日常く日常の生活にそれぞれが帰って行った。

●今年も夫はスペインへ

昨年に続き、フラメンコギタリスト吉川二郎さんと、二日間のスペインの旅へ出掛けた。スペインでは、吉川さんの演奏も数回あり、ギター館設立のきっかけになった故マヌエル・カーノ氏の子息ホセ・カーノにも会う予定があるそうです。閑空からの出発の為、ホテルに前泊し前夜祭をする予定。荷物は宅急便でホテルに送り準備完了、朝食後、駅まで送ります。

夫の代わりに散歩を？コロちゃんは5時30分になっても泣かない。昨夜5時までは騒がないで、と頼んでいたのが効いたらしい。が、心配になり5時40分頃覗いてみると爆睡中でした。寝ぼけ眼でしたが、無理やり散歩に連れ出す。途中出会った部落のひとつから、今日旦那はどうした？と聞かれ、面倒なので「ちよつとネ」とだけ言った。隣の牛屋さんには話してあるのでどうせすぐ皆に知れ渡る。11日も居ないのだから。

暑いですね、すれ違う人とはついこの挨拶。もう4日間も猛暑日が続いている、スペインもこの時期暑さは覚悟してネ、と言われた様だが、そちらの暑さ体験した事がないので比べようがない。今朝もコロは5時半になっても何の反応もない。こちらがしびれを切らして外に出ると縁台の上で爆睡中、外はまるで秋風を思わせる様な心地よい風が吹いていた。今日も暑くなるのかな。明日から私も忙しく動き回るので、コロは4日間獣医さんをお願いした。昼になったらシャンプーしておかなければ、大騒ぎされるんだろなあ。庭では夏の花が次々開花。厚い夏の予感がする。

梅雨明けしたらしい。連日の猛暑で庭の水やり時間がかかる。タップリかけると1時間はかかりしている。明日は義兄の1周忌、其の後姪たちが行きたい所に連れて行ってくれるというのでいくつか頼んでおいた。そういうわけでコロは獣医さんの所にお泊り。コロの今朝の目覚めも1時半でした。これは、夫が出かけてから新聞を止めて貰ったのが原因かも知れない。お蔭でゆっくり寝られて助かっている。スペイン御一同様は暑さもそれ程でもなく楽しんでいらしい。FBで送られてくる映像、其処には、美味しそうなディナーの写真が。心配な事が1つ、体重が・・・??

●猛烈な暑さ

とにかく暑い。先日的大雨で草花が勢いを増した。少し手入れをしようと頑張ってみたが、玉の様な汗をかきあきらめた。隣の牛舎では子牛6頭熱中症(体温が 40°C にもなる)になったと言って、バスタオルを濡らし体を冷やしていた。花の周りには蝶々がたくさん舞っていた。キアゲハ、クロアゲ

ハ、モンシロチョウ、ベニジミにそのほか数種類、暫く木陰で眺めていた。

先日FB友が、せみの羽化の写真を載せていたが、今日私も見つけた。羽化は夜の内、朝には飛び立つと聞いていたが昼間でも羽化するのですね。昼1時頃白い羽を見せて4時ごろ少し移動して、5時にはいませんでした。飛んで行ったのか、それとも猫にでもやられたのかな？暑い、といくら叫んでも、やることはやらなければならない。草叢の掃除などもその一つ、其処で厄介なのがやぶ蚊。これに刺されると、痒くて痒くて、もうたまらずに何もする気が無くなる。昨年ネットで探した屋外用虫よけ、作業するところに少し離しておいて置くと30秒おきに自動噴霧、草取りのお供、優れものです。

●朗読舞・音楽・芸術・映画・歴史旅・企画展

ことば座、1年ぶりのふるさと風劇団【ことば座】早くも12周年記念公演。今回は D.E. (龍)をテーマに白井先生が書き下ろした作品。白井先生の朗読に併せ小林幸枝が舞う。今回は聾啞のお客様もいらっしやるので、スクリーンで文字が映し出された。聾啞の方にとっては解り易かったと思います。幸枝ちゃんの手話舞もますます表現力が増してきた。久し振りの方にも会えて近況を話したりして、懐かしい一時でした。

養生日記

堀江実穂

・某月某日

今年もバーベキューと輪投げ大会があった。太っている私は毎年、職員さんに食べすぎるな、と

言われていた。しかし、今年は同じ班の職員さんは、いっぱい食べな、と言ってくれた。その言葉が嬉しくて満腹に食べることが出来た。食べたいものを食べたいただけ食べたのは久しぶりのことだった。大満足の気分は、その後の輪投げ大会で3年連続の優勝に導いてくれた。

・某月某日

私の住んでいるアパートの住人は皆、心の医療センターの患者である。最近隣に住んでいる夫婦が頻繁に家に来る。夕方突然玄関をドンドン叩いてきた。煩いので仕方なく玄関を開けると、「うるさくて眠れない！俺を眠らせないで殺す気か」と怒鳴り散らす。「私は今帰ってきたところですよ」というと不満そうに帰って行った。近所のおじいさんに聞いてみると、その夫婦はおじいさんの所にも「じいさん、デイケアで俺たち夫婦の悪口を言っているだろう」と大声をあげるらしい。それを聞くと、私も精神のバランスを崩すとあんな風になるのだろうか、自分が怖くなる。

・某月某日

先日、こころの医療センターでサマーコンサートが開かれた。私もピアノを2曲演奏させていたのだ。

家に来てくださる訪問看護の方が、家にあるキーボードをみて、弾いてみてと言われて弾いたことが切っ掛けで、演奏させていただくことになったのだ。人前で、自分を表現することは自分の存在感を持て、自分を取り戻せた感じになった。いろいろ言う人もいるが、自分を正直に表現できることほど嬉しく充実感のあるものはない。

《風の呟き》

馬鹿に出来ない話

打田昇三

かつて大日本帝国は「万世一系」の皇統が連綿と伝えられた……と言われる。しかし実際はそうでも無いらしく長い年月の間には庶民同様の相統争いが有ったらしい。天皇の梓は当代一つなので歴代皇統でも不満を持つ者が居るのは当然の事であり時には平将門や藤原純友の様に朝廷と対立する元氣者が居た。是は特に恥じる事でも無いと思うが昔は直ぐ「極悪人」にされてしまった。

西暦九百年代の初め頃は第六十代・醍醐天皇の治世が「延喜・天曆（えんぎ・てんりやく）の治」と呼ばれ、天皇親政が讃美されているけれども其の実態は藤原一族が強引な手段で権力の強化を図っていたに過ぎ無いように思われる。第六十一代の朱雀天皇は三歳の時に皇太子となり八歳で即位したが、即位後も常に母后（醍醐帝皇后・藤原穩子）に抱かれて過ごしたと言われる。目に見え無い何かを恐れていたのであろう。

その三十年ほど前には、宇多天皇が人物本位で菅原道真公を要職に起用したのだが、藤原一族は其れが面白く無いから無実の罪で道真公を失脚させ「太宰府高官」と言う名目で九州へ飛ばした。実際には罪人扱いの監視付きだと思われる。不遇の中に道真公は世を去った。通常は是で終わるのだが後に天神様と仰がれるお方は黙っていない。気象庁と相談し天変地異を実現させたのである。

承平二年（932）秋に真冬の寒さが到来して幼い醍醐天皇が庭に出てみると象の様に大きな鹿が現れ天皇を睨み付けた。警護の者が是を追ひ払おうとしたのだが鹿は「馬鹿にするな！」と怒り天皇に向かって突進して来た。天皇の近くであるか

ら警護の者も多くは居ない。「俺は天皇だ！」と叫んでも、鹿はシカト（無視）して追って来る。

辛うじて何人かの側近が太刀を抜き、夢中で追ひ払ったから鹿は宮殿の屋根に登り周囲を睨みつけていた。その形相が馬鹿に出来ない恐ろしさなので誰も退治が出来ず、一同が困り果てていた。

公卿たちが騒いでいる時に、摂政の藤原忠平が「馬鹿でも利口でも鹿は鹿で有ろう……」と言って、射手を探して来るように命じた。連れて来られたのが第五十七代・陽成天皇の甥・源経基で後に源頼朝に至る清和源氏の祖とされる人物である。

簡単に「あの鹿を射よ！」と言われたが、屋根上の標的であるし、相手も生きているから気軽に撃てない。暫く宮殿の床下に隠れて鹿の様子を確かめてから、頭部に狙いを定めて矢を放った。

狙いは正確で鹿は耳の根元を射られ即死状態で屋根から落ちて来た。周りの者たちは無責任に拍手喝采をしたのだが屋根に登っただけで射殺された鹿は不本意であり、更に鹿島神宮や春日大社などの境内には鹿の親類が居たから此の俎では済まされない。此の出来事を機に清和源氏が世に出る事になったのだが、約百年後には滅びる。

大鹿射殺事件の後、鹿の恨みでは無いが世の中は物騒になり西の海に海賊が出没した。関東では桓武平氏一族の領地を巡る内輪揉めから「承平・天慶の乱（平将門の乱）」が起こり、世情不安が広がった。平将門が伯父の国香を攻めた年の前年には陸奥国分寺と東大寺が落雷で焼失したほか、京都大地震で多数の神社仏閣が倒壊している。

時の政府は此の対策として諸国の主要な神社に祈願をさせたが全く効果は無かった。神域に居た鹿たちが「勝手なお願ひだけでも事態は解決しない……」と全国でシカト運動を展開したらしい。

忠臣の時代

打田昇三

欧米人が日本の歴史を学ぼうとして先ず興味を持ち、そして難解に思うのは「南北朝時代」だと聞いた事がある。二つの朝廷が対立して戦乱を招き半世紀以上に亘り庶民を苦しめたのであるから日本人が呆れ返るのは当然として、外国人が理解できないのも尤もなことであろう。

やがて是が「群雄割拠時代の温床」となり、更に戦国の時代になった……らしいが、大日本帝国の歴史教育では是を「吉野朝時代」と呼んで現代の天皇家が北朝系なのに其れに敵対した南朝系の武士たちを「忠臣」と称えていたから、北朝系に属して室町幕府を開いた足利尊氏などは「反逆者の代表・賊の親分・国賊」にされてしまった。

正中元年（一三二四）の夏頃から、上司にはいたく無いタイプの後醍醐天皇が、北条一族の鎌倉幕府に対してクーデターを起こそうと画策していたけれども計画が杜撰で集めたメンバーも適当、さらに秘密会議なのに酒宴優先の集会らしいから直ぐに発覚して関係者が捕まった。首謀者の天皇も危なかったのだが側近の万里小路宣房が鎌倉に行つて必死に庇つたから何とか助かった。此の人の祖先・宣孝は紫式部と結婚して歌人の大式三位を生んでいる。政治に疎い筈の文系公卿が、愚かな天皇の危機を救ったことになる。

後醍醐天皇が、幕府に抵抗したのは「皇室の持つ広大な領地への欲」が有ったからだと思う。皇位に就けば其れが占有出来るのだが、皇族が山賊のように増えて来ると相統争いが起こる。其れを避ける為に幕府は西暦一二八六年に①後深草天皇系 ②龜山天皇系……の両系統から交互に天皇を出す様にしたのだが、独占欲の強い後醍醐天皇は

理想的な政治と言うよりも自分の自由にならない事に腹を立てクーデターを画策したが失敗した。最初の事件で真犯人・後醍醐の身代わりに服役していた日野俊基という公卿が出所して来たので、今度は慎重に計画を練ったのだが、「何を仕出かすか分からない天皇・後醍醐」に不安を感じた守役の公卿が密告したらしく、京都に戒厳令が敷かれて前科がある日野俊基は真っ先に捕まり、直ぐに死刑の予約が取れたらしい。更に騒動の張本人として後醍醐天皇にも逮捕状が出て、京都に三千騎以上の幕府軍が進駐して来た。

逮捕された天皇は「朕は如何にすべきか？」などと呑気な事を言うだけで何も出来ない。そうした中で毅然と行動したのは宣房の息子・藤房である。女装させた天皇を中宮(皇后)用の車に乗せて三種の神器を隠し持ち、脱出に成功させた。逃げてはみたが、楠木正成が立て籠る赤坂城へ行くこうとして捕らわれ、天皇は隠岐の島に流され、藤房は常陸国筑波山麓の小田城主に預けられた。

近辺には後醍醐天皇が属する大覚寺党の庄園が多くあり天皇に好意的であったから藤房も現在の「つくば市」に一戸建ての住宅を与えられ、割と恵まれた暮らしが出来たと思われる。七年後に北畠親房が小田城で「神皇正統記」を著わすことが出来たのも其の影響であつたろう。しかし、此の大忠臣も、やがて「建武の中興」で政権を握った後醍醐天皇に失望する。「天皇親政」の看板は立派だが貴族・公卿など特権階級本位の政治でしかなかったからである。不手際、不公平、不行状が続く天皇に愛想を尽かした藤原藤房卿は、行方不明とされているが…筑波山の周辺で仏門に入り静かに余生を送ったのではなからうか。

神様の怠慢

菅原茂美

神様だって、職務怠慢なら、免許が剥奪されますぞ！私の目から見れば、どうも神様は、職務に専念してないように見える。

特にそう思う理由は、人類とかいう「寄生虫」が、命溢れるこの母なる地球に宿り、我が物顔で乱暴に振る舞っている。しかも環境汚染を続け、他の生物を絶滅に追いやっている。更に仲間同士ケンカばかり。神様は、そんな「ろくでなし」に鉄槌を加える「義務」がある。それが日和見主義で、見て見ぬふりをするもんだから、ろくでなしは、いい気になつて益々伸し上がる。

神様は乱暴者を抹殺するなど、手を汚すのが嫌だと仰るなら、宇宙人に電話でもして、対応を頼めばよい。太陽に一番近い恒星「プロキシマ・ケンタウリ。地球から4.2光年」の惑星にも、水や空気があるらしい。とすると地球より1千万年ぐらい文明が進んだ宇宙人がいるかもしれない。ならば、どんなテクニクでも持っている筈。地球を助けると思つて、一肌脱いでくれ！

もし宇宙人が人種改良方法など知らないと言うなら、私が教えてあげる。それはまず江戸後期、越後に「良寛」という禅僧歌人がいた。脱俗の超善人だ。その遺骨を掘り返し、DNAを抽出・培養増量する。それを1918年に世界流行した「スペイン風邪」のウイルスゲノムに組み込み、全世界にバラ撒き、人類に感染させる。特に大声で独善主義を吼えまくる世界の指導者とやらには、濃厚感染させる。すると良寛の善良遺伝子が活躍し、世界中は善人だらけ。戦争のない平和が訪れる。これくらいの荒療治をしないと、人類という怪物

は反省しない。それを成し遂げたら、神様も、私みたいなチンピラに、文句を言われなくて済みますぞ！

更にもう一つのテクニクは、250万年ぐらい前の化石人骨・パントロプス・ロブストスに、しっかりと存在する「矢状稜(じょうりょう)」を復活する事。地球より1千万年も文明進化した宇宙人なら、時計を逆回りして、数百万年ぐらいタイムスリップするのはオチャノコサイサイだろう。進化をある時点で凍結させる。ロブストスの頭頂部には、前後に走る「矢状稜」という堅い骨の突起があつた。今のゴリラの雄にもある。これは下顎弓からの咬筋が付着する頑丈な骨である。この堅い骨が脳天に蓋をしている限り、いくらもがいても、大脳が膨らむ余地はない。人類は柔らかい物を食べるようになったため、咬筋は縮小し、頭頂の固い蓋もなくなった。その為「大脳」がむやみやたら膨らみ、今日のような「強欲」がはびこり、他人の物を掠め取るうとする醜い動物に劣化していった。進化を逆戻りさせれば、他の生物に迷惑をかけない穏やかな生物となり、他の生物からも、尊敬され、真正正銘の地球の「王者」となれる。ゴリラは天道に背かぬ紳士の集団。人類はゴリラの弟子にでもなつて修行を積み、新規巻き直しを図るべきだ。

神様よ！怠慢は許されませんぞ！人類はいくら進化しようが、一向に平和を手に入れる技法を編み出せず、もがいている。ここはメンツを捨て、上記2法のいずれか又は両者を同時併用して、地球上に真の平和が訪れるよう、力を貸して下さい。お賽銭はたんとはすむから…。

【特別企画】

打田升三の平家物語

巻第八・(二・三)

鼓判官(つづみほうがん)のこと

西国での敗戦はあっても京都には木曾義仲に従う源氏の軍勢が満ち溢れていたから其れらの者による乱暴狼藉も後を絶たなかった。彼らは賀茂神社や八幡社の神領なども平気で青田を刈って馬の餌料に充当した。さらに他人の家の蔵を勝手に開けては物を奪い、衣装を剥ぎ取る野蛮な行為を繰り返したのである。そのために一般の人々は「平家の時代に六波羅殿と言えど恐ろしい存在ではあったけれども個人の衣装を剥ぎ取られるようなことは無かった。平家から源氏に入れ替わって余計に悪くなってしまった！」と嘆いたのである。

其の様なことから後白河法皇は木曾義仲に対して使者を遣わし「武士団の乱暴狼藉を鎮めるように！」と強く命じられた。お使いに立ったのは別流平家で壱岐守朝親の子・壱岐判官朝泰(いきぼうがんともやす)という者である。此の朝泰は鼓の名手である人々から「鼓判官」と呼ばれていた。

木曾義仲は法皇の使者である壱岐判官に對面して法皇の命令を聞いたのに、その返事もせず「貴方が鼓判官と呼ばれるのは大勢の者に打たれたのか？それとも頬を張られたのか？」と無礼なことを言い出した。朝泰は憤然として席を立ち、直ちに法皇の御所に参上して「木曾義仲は愚かな者で間もなく朝敵になる人物です。直ちに追討されるべきです！」と個人的な恨みで申し上げた。

報告を聞いた法皇も個人的な悪意を感じ、本来

であれば木曾追討の是非を検討するのが筋なのにそれをなさらず(木曾義仲と同じように愚かな判断で)比叡山の天台宗座主と三井寺(園城寺)の長官に仰せられて双方の寺から武力自慢の僧兵を出すように声を掛けた。その結果、法皇の指揮下に呼び集められたのは、僧兵とは名ばかりの無頼の徒や身持ちの悪い偽法師などばかりであった。原本には「むかえつづて」石投げが得意な賤民「いんじ」同じ様な無頼の徒で地域的な勢力を持つ者」など、言う程の価値が無い者である。

一方、木曾義仲側では法皇の御機嫌を損ねたと言う噂が立ったので其れまでは従っていた京都近辺の武士団が背いて法皇の側に付いてしまった。それに伴い信濃源氏や分流源氏の村上三郎判官代なども義仲を見限って法皇方に行ってしまった。

重臣の今井四郎が「是は一大事です。しかし十善帝王(前世の功德で王として生まれた天皇)に向かい合戦をする訳にはいきません。此処は兜を脱ぎ、弓の弦を外して降伏する(法皇に従う)ほかは無いでしょう」と言ったのだが、義仲は怒って「我らは信濃を出てから北国では砥浪山・黒坂・篠原、西国では福立寺・縄手・笹が瀬・板倉の城を攻めたが未だに敵に後を見せた事はない。相手が如何に十善帝王であろうとも降伏することは出来ない。法皇側が言うように我らの軍勢が都の守護をしているのに馬一匹にも乗らずに任務が果たせるか。幾らも在る田圃の中から稲を刈って馬の飼料にしたと言つて法皇から咎められる筋はない。

また幾ら武士でも食糧が無ければ戦えぬ。大臣の屋敷や皇室の御所に侵入して食糧を奪ったのであれば苦情を言われても仕方ないが、その辺の田圃で稲を刈って合戦するのがどうして悪いのか。察するところは鼓判官が法皇に告げ口をしたか

らである。鼓判官は我らの敵である。悪い鼓を打ち破れ。今度が義仲最後の合戦になるぞ。鎌倉の頼朝が此の事を聞けば黙っては居ないであろうから、早く合戦の準備をせよ！」と命じた。

しかし義仲に愛想を尽かして逃亡した者が多いので残った兵力は僅かに六、七千騎に減ってしまった。義仲は飽く迄も強気で、勝利した合戦の前列に倣い隊を七つに分けて先ず樋口次郎兼光が二千騎を率いて新熊野(いまくまの)京都、東山地区に向かい搦手(裏口)軍となった。残る六手の攻撃軍は条里制都市の各小路から河原へ出て七条河原で合流するように決めて出発した。

合戦開始は十一月十九日の朝になった。法皇の御所・法住寺殿には二万余の軍勢が集結したとする情報が伝わっていたが、言うなれば官軍になる法皇方でも予算が無かった為か味方の目印として笠に松の葉を付けた。木曾義仲の軍勢が法住寺殿の西門に押し寄せると法皇方の総指揮官として鼓判官朝泰が合戦の采配を振るっており、赤地錦の直垂(したたれ)に鎧は着けず兜だけ被り、その兜にはお呪い(おまじない)のように四天王の絵が貼り付けてあった。

其の格好で御所の西端にある土塀の上に乗った朝泰は、片手に鉾(ほこ)諸刃の剣に長柄を付けた武器を持ち、片手に密教用具の金剛鈴(こんごうれい)に鈴を付けた物を持って其れを振りながら、寺院の行事のように時々舞うような素振りを見せていた。

それを見た若い公家たちは「場違いなことをする！朝泰には天狗が取りついたであろう」と笑っていた。

やがて朝泰は攻め寄せた木曾義仲に向かい大声で叫んだ。「昔は宣旨(口頭命令)を読み聞かせれば枯れた草木も花開き実を付け、悪鬼・悪神も従つ

たものである。如何に末代とは言え、汝らは十善帝王（先述、此の場合法皇に向かい弓を引くか！汝らが放つ矢は、返って自分の身に当り、抜いた太刀は身を斬ることになるぞ！）是を聞いた義仲は「勝手なことを言わせるな！」と叫び、木曾軍は一斉に鬨の声を上げた。

裏手に回った樋口次郎兼光の軍は、表側から木曾軍の喚声が聞こえたので鎬矢（かぶらや）先を空洞にして音の鳴るようにした矢に火をつけて法住寺殿内に射込んだ。折から風が強くなり御所内の各所に火事が発生し忽ち猛火となって天に燃え上がった。合戦の原因を作った鼓判官朝泰は踊りを中止して無責任にも真先に逃亡した。

総大将が逃げたからには、残された二万余の官軍も我先に戦場を離れるしかない。急なことなので弓を持つ者は矢を忘れ、矢だけ持つて弓を忘れる者もあり、或いは長刀を逆さに持つて自分の足を斬る者も居た。中には弓の弦を足に掛けて外そうともせずに走る者もあり、守備軍は壊滅状態で逃亡した。七条大路の外れには法皇方の摂津源氏が詰めていたが、敗戦を知って地元である西の方へ逃れて行くことにしたのである。

一方で地元の者たちには木曾軍が負けると思い込んで「落人が来たら準備して待ち受け、討ち取れ！」と命令していたので、領主の命令を守る人々が屋根に登り、葺き板を抑えるための石を揃えて待つていた。其処に摂津源氏が逃げて来たので「落ち人が来た！」と一斉に石を投げ付けたから慌てて「我々は院方の者である！」と叫んだけれども領民たちは「何を言うか法皇の御命令である。打ち殺せ！」と攻撃を止めない。落ち武者たちは馬を捨てて逃げた者もいるが、打ち殺された者もあり散々な目に遭った。此のほか、八条付近は山僧

（僧兵）たちが守っていたが木曾軍に攻められて或いは討死し、或いは何処かへ落ちて行った。

宮方の武将である主水正親成（もんだのかみちかなり）
主水正は天皇の飲料水、氷、粥を扱う役所の長、正六位下）は薄い青色の着衣に薄緑色の糸で飾った簡略な鎧を着用して白い毛に黒の毛が混じった馬に乗り賀茂川沿いを上るように落ち延びて行った。是を木曾方の今井四郎兼平が追い掛け相手の首を狙って射落とした。親成は文官である清原一族であり大外記（だいげき）と言う太政官高官の息子である。現代で言えば東京大学助教授のような立場に居たので、世間の人は「学者なのに鎧など着たから命を落とした！」と言った。

この他に木曾方から寝返って院方に付いた信濃源氏の村上三郎判官代も討たれ、高階一族の近江中将為清と藤原道隆の子孫である越前守信行なども射られてから首を失った。また清和源氏の伯耆守光長（源頼光の子孫、其の子・判官光経も共に討たれており、宇多源氏である安察大納言資方（あざちのだいなごんすけかた）の孫・播磨少将雅方も鎧に立烏帽子という儀式に出る様な格好で出陣したが樋口次郎に生け捕られてしまった。

武士では無いが御所に居た天台座主の明雲大僧正と事務担当の円慶法親王も、火が出たので馬で避難するところを武士並みに木曾軍の一斉射撃で撃たれた上に首を取られてしまった。豊後国の国司であった刑部卿三位藤原頼資は、その官が罪人に刑罰を科する立場ながら、御所に居た為に火災を避けて河原へ避難した時に木曾軍の兵士に捕らわれ着衣を奪われて寒風の中を素裸にされた。

凍結寸前で、合戦見物に来ていた下級の僧侶が発見してくれたのだが、自分が来ていた二枚の着物を与えれば良いのに、そうではなくて上に着て

いたチョッキのようなものを投げ与えた。資頼はそれを被る様にして帯も無いから見苦しい姿の俣で白衣姿の僧に連れられて行った。途中で知人を頼ろうと、此処は誰の家では無いか？などと聞きながら歩いたので、高官の惨めな姿に都の人は薄情にも手を叩いて笑っていた。

後白河法皇も輿に乗って避難したのだが途中で木曾軍に攻撃された。それを、赤黄色の半鎧を着て烏帽子を被り従っていた豊後少将・藤原宗長が「是は法皇の輿であるぞ。誤って無礼を致すな！」と叫んで制した。下級の兵たちは法皇と聞いて其の場に平伏したのだが幹部級の武士は驚かない。宗長が「何者であるか？」と問えば「信濃の国の住人・矢島四郎行綱」と名乗った。信州佐久の武士である。行綱は、法皇の輿を拘束して五条の内裏に押し込め厳しい監視下に置いた。

一方、当時四歳であった後鳥羽天皇は取り巻きの者に連れられて船で避難をした。木曾方の兵士は逃げそうな者は誰でも攻撃するので天皇も散々に射られたが随行していた七条侍従信清（一条天皇皇子・藤原定子の兄の系統、後鳥羽天皇生母の弟）と紀伊守・藤原教光が此処でも「是におわすは、主上（天皇）である。誤ちを致すな！」と叫んだので兵たちは下馬して平伏してから、やがて閑院殿（高倉天皇以来天皇の避難所）へ案内をしたが、行幸の様はお粗末であった。

法住寺合戦（ほうじゅうじがっせん）のこと

少し長くなるが、此の章段で巻第八が終わるので続けることにする。内容は「鼓判官」の延長である。後白河法皇方の武士で宇多源氏の末裔にな

る近江守仲兼は五十騎程の兵力で法住寺殿の西門を護っていた。其処に近江源氏（清和源氏）の錦織（山本）冠者義高が駆け付けて来て「貴方達は誰を護ろうとして此処で戦をするのですか？法皇も天皇も既に避難をされて、此処には御出でにならないそうですよ！」と教えてくれた。

其れを聞いた仲兼は其の場を離れようとしたのだが既に回りは木曾軍に囲まれているので余所へ行くには敵陣の何処かを破らねばならない。適当に狙って突入したが激戦になり、五十騎が八騎に減らされてしまった。その中に河内の日下党（くさかとう）東大阪の武士団 加賀房と言う法師が居り白葦毛の気の強い馬に乗っていた。そこで加賀房が「此の馬は気が強すぎて合戦でも言うことを聞かなくて困る！」と言ったので、仲兼が「それならば、私の馬に乗り変えよ」と言って栗毛で尾の先端が白い馬を呉れた。主従八騎は木曾方の武将根井小弥太の守る二百騎程の軍勢に突入し、五騎が討たれた。主人に馬を変えて貰った加賀房も其処で討たれてしまったのである。

仲兼の一門庶流に、少し紛らわしいが信濃次郎藏人仲頼と言う者が居り、合戦中に敵に遮られて主人（仲兼）の姿を見失ってしまった。其処に栗毛で足元が白い馬が走り出して来た。下人（仲兼に付いていた部下）に「此の馬は主人の源藏人殿が乗っていた馬で有るから主人は既に討たれている。一緒に死のうと約束したのに別々になるのは悔しい。どこに突入されたか？」と訊ねると「川原坂の軍勢に突入されたのでしよう。その辺りから馬が出てきました」と答えた。仲頼は「それならばお前は此処を逃れて故郷に帰り此の合戦の有様を伝えよ！」と命じて、只一騎、敵陣に駆け入り大音声で「宇多天皇皇子・敦躬（あつみ）親王より九代の後

胤、信濃守仲重が次男・信濃次郎仲頼、生年二十七歳、我と思わん人々は寄り逢えや。いざ見参！」と叫びつつ縦横無尽に戦って敵を倒していたが敵の数は余りにも大勢なので遂に討死をしてしまった。（敦躬親王は宇多源氏の祖）

一方で、仲兼は生き残っていて仲頼の死を知らない。戦場を脱し、弟の仲信と家臣一人の主従三騎で南の方向に落ちて行く途中で都から避難して来た摂政・藤原基通の牛車に宇治・木幡山で追い付いた。基通は木曾軍かと警戒し車を止めて恐る恐る「何者であるか？」と尋ねた。仲兼兄弟が名乗ったので安心して「木曾軍かと思ったが、良く来てくれた。傍に居て守護するように」と、急に偉そうに命令した。是を受けて仲兼らは宇治に在った藤原忠実の別邸・富家殿（ふけどの）まで摂政を守護してから河内へと落ちて行つた。

合戦の翌日、つまり寿永二年（一一八三）十一月二十日、木曾義仲は六条河原に出て昨日の合戦で討つた者たちの首を点検した。原文に「かけ並べ」と書いてあるから作品展のように展示したのかも知れない。数は六百三十余人分であった。其の中には延暦寺の明雲大僧正や事務長の円慶法親王の首も含まれていた。源平盛衰記によれば木曾方の武士・楯六郎なる者が比叡山を攻めたらしい。

大勢の見物人は大僧正らの無残な姿に涙を流した。

そういうことにはお構いなしに、木曾義仲は七千余騎の軍勢に東を向かせて、天も響き大地も揺れるような勝鬨を三度も挙げさせた。京都の人々は（此の暴挙に）驚き大騒ぎとなった。

今は亡き少納言入道信西（後白河法皇の側近、平治の乱で殺害された）の子である参議・藤原長教（ふじわらながのり）は、法皇の居る五条内裏に行つて「申し上げ

ることがあるから通せ」と言つたのだが警備の武士たちが許さなかった。そこで近辺の小屋に入り髪を落とし黒衣を着て僧になり「こういう姿ならば良かるう！」と言つたので警備員も仕方なく通した。俄か法師の長教は御前に出て木曾軍の被害に遭つた主な者たちのことを詳しく報告をしたので、法皇は驚くと共に特に明雲大僧正の死を悼んで「明雲ほどの高僧が無残な死に方をするとは思わなかった。私の命に代わってくれたのであらう」と涙が止まらなかった。

一方で木曾義仲は家臣一同を集めて軍議を開き「天皇を相手にして合戦に勝つた。この分では、法皇にも天皇にもなれるけれども、天皇になるには髪を童子のようになければならず、法皇になる為に坊主頭にするのも嫌だ。いつそのこと関白にならうか」と言いだした。書記として付いていた大夫房覚明が「関白は大織冠藤原鎌足公の子孫と決まっております。殿は源氏ですから」と言つたので「それでは仕方が無い」と皇室の厩舎を管理する役所の長になった。（皇族の動きを抑制したとも考えられる）さらに丹後国を自分の領地にした。坊主頭の事を言つたのは後鳥羽天皇が四歳であつたから童形だつたのを、天皇は全て坊主頭だと思ひ込んでいたのである。

さらに義仲は前関白・藤原基房の娘を妻とし、十一月二十三日には三条中納言と呼ばれた藤原朝方以下四十九人の公家たちを免職して監禁した。五年前の治承三年に、平清盛が関白・藤原基房以下四十三人の職を止めたが、今回は四十九人であるから義仲は平家の悪行を越えたことになる。

一方、鎌倉では頼朝が、義仲の乱暴狼藉を鎮定する為に弟の蒲の冠者範頼（かばのかんじやのりより）と九郎冠者義経を派遣した。然し途中で既に法住

寺殿が焼かれ法皇も天皇も木曾義仲に抑えられて天下が暗闇同然になったと聞き「此の俛で都に入り訳も分からず合戦することも出来ない。」

取り敢えず鎌倉の指示を仰ごう…」と熱田神宮の大宮司の許へ行った。此処は頼朝の母親の実家になる。其処に法皇に仕える大江一族の武士・宮内判官公朝と藤原一族の藤内左衛門時成がやってきて木曾義仲の乱暴を訴え出た。

源義経は「それでは宮内判官に關東へ行つて貰おう。状況を知らない我々が行つても質問に答えられないから」と言つて公朝を鎌倉へ行かせた。公朝の部下は合戦を恐れて逃げていたので十五歳になる息子の公茂(きんもち)を連れて行つた。

關東で公朝の報告を聞いた頼朝は、木曾義仲の暴挙もさることながら事件の発端となった鼓判官の行動を怒つた。「先ず鼓判官知康が挑発的な言動で事件を起こさせ、御所を焼き多くの高僧の命を奪わせたことは許し難い。知康は既に勅命に背いた者である。その俛にして置いては更に大事を起こしかねない！」と早馬で使者を送つてきた。

是を聞いた鼓判官は慌てた。何とか弁解をしようと鎌倉へ向かったのだが幾ら急いでも当時の乗り物は馬が最速であつたから休息なしで駆け通して鎌倉へきた。しかし頼朝は「あいつめには誰も会ふな！」と命じていたので毎日、頼朝の官舎へ行つても無駄であつた。結局、面目を失つた鼓判官は伏見稻荷の近くに隠棲する他は無かつた。

木曾義仲のほうは頼朝の動向が気になつて苦し紛れにとんでもないことを思い付いた。西に居た平家に使者を出して「平家の皆さんも都に上り、私と共に東国(鎌倉の頼朝)を攻めましょう…」と申し入れたのである。この突飛な申し出に対して單純な頭の内大臣宗盛は喜んで賛成しそつであつた

が、平大納言時忠や新中納言知盛が強く反対し「如何に世も末とは言え、木曾義仲に取り込められて都へ戻るなどと言うことが有つてはなりません。此方には当代の天皇が居られ、皇室の証である三種の神器が有るのでから木曾義仲が武装を解いて降伏して来るように言うべきです」と主張し、宗盛も諦めて其のように返事をした。

その頃、摂政関白の藤原基房が木曾義仲を呼んで「平清盛公はあれ程の悪事を行った人物ではあるが、大塔建立とか福原(神戸)港工事で人柱を石に替えるなどの善行を施したので平穩無事な二十余年の治世を送ることが出来た。人に憎まれる行動だけで世を保つことは難しい。この際、無実に近い者などを許して官職を戻し、軽い罪の者は赦すべきであると思う」と申し入れた。

木曾義仲は全く野蛮な武士と思われていたけれども関白の意見に従つて赦免措置を講じた。それと共に基房の三男である師家が中納言・近衛中将であつたのを内大臣にして、いきなり天皇の代りを務める摂政に任じた。しかし大臣でも卒があるから商品のように量産は出来ない。そこで徳大寺左大将実定公(巻第一、二代后に登場する多子皇后の兄)が内大臣であつたので、その官を借りる形で藤原師家を内大臣にした。それがいつしか人々の知るところとなり、新摂政は官職を借りたから「借りる」で「かる」の大臣と呼ばれるようになった。「かる」は「軽」に通じたかも……。

寿永二年十二月十日、後白河法皇は五条内裏を出て近臣である平信業の子・大膳大夫成忠の屋敷へ行かれた。其処は六条西洞院に在つた。同月十三日、宮中では歳末の仏事(修善)が行われ次いで公務員に対する叙位・徐目(じょういじく)位階付与・恩賞・人事が行われたが、是は木曾義仲の思うが俛

であつた。しかし当時は西に平家が無事であり、勢力を回復して居り、源頼朝は東国で徐々に力を増して、木曾義仲だけが都で虚勢を張つていて誰も逆らえなかつただけなのである。是は、かつて中国で前漢・後漢の間に王莽(おうもう)紀元前後に前漢の幼帝を擁して後に毒殺、新国を建てるも失敗、自滅が権力を握るも十八年で滅びたようなものである。敵を増やした木曾義仲は警戒して都の四方の関を閉じたので、国家への租税(物納)も入らず年貢も届かず流通する物資も無く、京都中の者は身分に關係なく水の少ない池に取り残された魚のような状態に置かれていた。そうした状態で年が暮れて、年号は寿永三年になつた。やがて頼朝が派遣した關東軍が都に上つてくる。

(巻第八・終)

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは右記会員まで。 白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター、いしおか育ち他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集（全 6 巻）、
歴史の嘘、私本平家物語、
私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、
ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遙かなる旅路（1、2）
- ・木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ
（全 24 巻）
石岡地方のふるさと昔話、
茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、
霞ヶ浦の紅い鯨、
朗読/ふるさと物語…他

ふるさと風劇団「ことば座」団員&朗読教室生募集

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。月 1 回コース(受講料:¥6,000 円) 2 回コース(受講料:¥9,000 円)

ふるさと風の会編集事務局 〒315-0001 茨城県石岡市石岡 13979-2 TEL 080-3125-1307 (白井)